



東方三界黃龍伝

『absolute zero』

小龍

目次

1	木佐と赤帝君	5
2	あの事件	15
3	ミニ黄龍の謎	26
4	木佐と白帝君	33
5	予兆	43
6	水雲宮の日常	54
7	魁星の力	65
8	最初の記憶	76
9	沙龍を探しに	87
10	灰色の世界	98
11	闖入者と管理者	108
12	水の底	118
13	悪夢の終わり	127
14	現実の始まり	134
15	absolute zero	141

登場人物

沙龍^{シヤロン}……主人公。黄龍の保持者。水雲宮にて自墮落な生活を満喫中。

木佐小次郎……沙龍の親友。四方将神として忙しい毎日を送っている。

九雷……天界軍元帥。沙龍の恋人。

魁星^{かいせい}……しばらく天界を追放されていた、さる名門の跡継ぎ。

天真……九雷の友人の開業医。「天界一の名医」と称されている。

緑麗^{りょくれい}……沙龍の前世の将神。故人。一番最初の黄龍の保持者。

1 木佐と赤帝君

薄暗い書庫室に、木佐小次郎の姿があつた。

天井近くに、明かり取り用の小さな窓があるが、書物を読むにはあまり適さない光量で、木佐の手元にも暗い影が出来ている。

が、木佐は電灯を点けるのが面倒なのと、忘れているのとで、しばらくそのまま手にした冊子タイプの古書を読んでいた。

書庫室の四方の壁は全面本棚になっていて、さらに、それだけでは収まりきらない書物が、あちこちに積まれている。巻物タイプの、年代を感じる古めかしいものから、紐で閉じられた分厚い冊子、それに、ディスクに収められた電子タイプのものまで、ここには揃っていた。

かうんきゆう 火雲宮 しじんふ 本殿の書庫に行けばもつと膨大な書物があるのだろうが、木佐には、
ここの四神府の書庫だけで充分だった。

広くもなく、狭くもないこの空間も妙に居心地がいい。古い書物独特の、黴の

臭いも微かにしたが、そこは最新式の空調のおかげで、さして気にならない。どころか、木佐は古い紙の臭いが好きで、東京で暮らしていたときも、よく古本屋に通っていたくらいである。

木佐がいま読んでいるのは、四神府の事件簿とも言うべき記録であった。

ここに勤めるようになってから、一通り、天界の成り立ちや歴史、過去の問題のあった事件、現在の行政システムなどについては、書物を漁って理解した。

それが、黒帝玄武佑君という称号を得た、自分のすべきことだと思ったからである。

同僚の赤帝君せきていくんや、秘書官の曹昌そうしょうにも色々教えてもらった。

それを、周囲は『勤勉だ』と讃えるが、木佐自身は自分を勤勉だなどと思ったことは一度もない。いかに効率よく仕事をするか、を追究した結果、必要最低限のことをしているだけなのである。

(眠い……)

木佐は、いま読んでいる冊子が一段落ついたところで、眠気と共に昨夜の件を思い出した。

昨日は、いつもの如く自分の職場に邪魔をしに来た迷惑コンビに、いつもの如く歓楽街に連れて行かれて、そこで待っていた、あまり好みではない美少年と二人きりにされたはいいが、どうもそんな気になれず、言葉を労して帰ろうとしたら、その美少年が結構食い下がるので、もうなにもかも面倒くさくなって、自宅に連れ込んだら、思いのほか具合が良かったので、ちよつと調子に乗ってしまった——という、どこにでもある、酒の上での話だ。

その美少年は、どうも西方軍所属の下士官なのだそうだが、つまり、あの迷惑コンビ——陽輝ようきと沙龍シャロン——は、木佐に恋人を作らせようとしているのである。

それだけ聞けば、少々のお節介ではあるが、一応、美談の範囲に入る。

しかし、あの二人はそれを面白半分にはやっているとあるところがあるので、木佐もありその思惑には乗らないようにしていたのだが、昨夜は嵌ってしまった。

(まあ、どうせ、一夜限りだ)

そう思ったので名前も聞かなかった。

実際、お相手の美少年の方も、木佐の性癖を知って、少々幻滅気味だったようだ。

外見で勘違いする者が多いが、木佐にはかなりサド気質がある。だから、それ相応の相反する性質を持つ者でないと、いわゆる『特定の恋人』には成り得ない。

沙龍はそこら辺を熟知しているはずなのに、その上で知らんふりして面白がっているのなら、今度、一回釘を刺しておかないと、と木佐は思った。

(全く……、自分が順風満帆だからって、人のお節介まで焼くなよな……)

が、反面、沙龍がそういったお節介を焼いてくれるのは、嬉しく思っていた。多分、沙龍なりに、ここでの自分の暮らしぶりを居心地のいいものにしようとしてくれているのは事実なのだろう。

昔、沙龍と出逢って暫くしてから、聞いたことがある。

「なぜ、男の家に平気で上がりこんで、あまつさえ、無防備に寝れるんだ」

——と。

すると、沙龍はこう言ったのだ。

「だって、キサさん、女相手にはどうせタタナイじゃん」

これには面食らった。

言った覚えも、匂わせているつもりもなかったのに、見抜かれていたのだ。

沙龍が特殊な環境で育ってきたせいなのか、単に洞察力が優れているのか、そこから辺はどうでもよかった。

ただ、世間にはそれをひた隠しにしていた木佐にとって、この沙龍の存在というのは、奇跡にも思えた。

自分の性癖を知らせ、実際、修羅場も見せて、尚且つ態度が変わらなかつたのは、沙龍くらいのものなのだ。

これを執着というのなら、なんとでも呼べばいい——と、木佐は思っている。

「真武君、しんぶくんここだったのか」

書庫室にパツと光が差す。両開きの戸を開けて入ってきたのは赤帝君だった。

「なにか、面白い発掘でもしてるのか？」

赤帝君はそう言いながらも、それには大して興味がないとでもいうように、木佐に回覧書類を差し出した。

これを渡すために木佐を探していたらしい。

「いや、ちよつと気になることがあつただけさ……」

木佐は、いままで読んでいた本を書棚に戻し、回覧書類の方に注目した。

四方将神宛てに入る、様々な要請、各地の報告、その他宮中イベントのお知らせなどが、嫌になる程ズラツと並んでいる。

「今週は忙しいな……。白帝君はくていくんにも、たまには帝都に出てきてもらいたいもんだ」

「知らないのか？ 聖霄せいしやう はいま人界に降りている」

「え？ なんでまた」

「太上道君たいじやうどうくん を探しに行ったんだろう」

「ああ、白帝君の師父の？ 数千年、行方不明とかいう、最高神の一人か」
木佐は、そういう情報だけはしっかり覚えている。

確か、太上道君は『師父』というよりも、白帝君にとっては『育ての親』と言った方がいいくらいの関係だったはずだ。

「しかし、白帝君なら、つい先週、僕の家には夕飯をたかりに来ていたような気がするが……」

「ああ、ちよくちよく戻ってきてはいるようだが、任地にはほとんど顔を出して

いないだろう。汎々ファンファンが代わりに色々やっているようだが……。我々の仕事は秘書官が全てカバーできないのが辛いところだ」

赤帝君が、微妙に話題をずらそうとしているのに気付かない振りをして、木佐は聞いた。

「なぜ、太上道君を探す必要があるんだ？」

「……」

赤帝君が、案の定、少し困った顔をしている。

「極秘事項なら聞かないが」

「確かに、軍部では極秘事項に入るんだろうな。といっても、私自身はまだ推測の域を出ていない。九雷元帥はなにも言わないからな」

「……？」

「推測だ。そう思って聞いて欲しい。太上道君を必要とするような事態が起こりうる——と、いうことじゃないかと思う。聖霄の秘書官の汎々に会ったことは？」

「一、二度、見かけたことはあると思う。結構、若いスタッフだろう？ 華奢な

感じの」

木佐の感覚で言えば高校生くらいにしか見えなかったが、ここ天界では、そういった外見はほとんど当てにならない。

「ああ。それだ。その汎々なんだが、元は諜報部に居た男で、九雷元帥の推挙で聖霄の秘書官になったんだ」

「諜報部か……」

「九雷元帥もかなり長い間、諜報部に居たことがあって、いまでもそのパイプ・ラインは健在だ。つまり、あの仕事をしない聖霄に有能な秘書官をつけてやろうという配慮と、聖霄を取り込もうとする思惑だろうな」

赤帝君が、度々、九雷のことを批判的な目で見ているのは知っている。その原因も、大体は理解しているつもりだ。木佐がさつきまで読んでいた古書も、そのことと深く関係がある。

赤帝君は、先代の青龍である敖広こうこうを慕っていた。それは、自分にとっての沙龍ほどの存在だったのかもしれない、と木佐は思っている。

だからこそ、例え職務とはいえ、その敖広を殺した九雷を許すことができない

のだろう。理屈ではなく、感情の部分で。

「しかし……、白帝君だって、そこら辺は充分承知しているはずだし、そもそも、『取り込まなくちゃいけない』というような関係でもないだろう？」

木佐は、赤帝君と九雷の確執については、中立の立場を取っているつもりだ。それは、白帝君も同じである。

「そうだな。それはいまは置いておこう。とにかくそういう理由で、聖霄は恐らく、汎々経由でなにか情報を掴んで、太上道君を必要とする事態を予測しているんだろう」

「それはどういった事態なんだ？ 良くない予感はずっとしているが」

「最高神四名が居なければできないことがある。西方とのゲートを開くことだ」

「…… “西方” ？」

木佐は、天界に来てから初めて聞くその言葉を繰り返した。

『西域』というのは、天界と仙界の西の境界辺りを指すのだから、これは違いうだろう。

「そうだ。我々の住むこの東方天界と対を成す、西方の神魔の世界が当然ある。

大昔に決められた不可侵条約によつて、東西の行き来はされていないが、通天教主（※仙界の一派閥、截教のボス）は何度かその禁を破つて西方世界と取り引きを
していたし、我々の中にも向こうの世界と通じていた者が過去には居た」

「『過去には』ということは、少なくとも現在ではほとんど居ないということか。……しかし、最近、なんらかの疑わしい事態があつたが故に、白帝君が太上道君を探しに行つた、と？」

木佐の的確な物言いに、赤帝君は首肯してみせた。

2 あのと事件

せいいていせいりゆうこうくん
青帝青龍広君（敖広）というのは、九雷に青龍の力を譲渡した、東海龍王家の嫡男だった人物である。

本来なら、東海龍王と東方軍大将の地位も自動的に降ってくるような、輝かしい家に生まれついた生粋のエリート、といえる。

しかし、敖広には双子の弟が居て、どういう継承劇があったのかは知らないが、龍王と大将の地位は、この弟の方が継ぐことになったらしい。

敖広は四方将神として火雲宮の中枢に居たわけだが、三千年前の緑麗の叛乱の折に、緑麗と同調する形になって、単独で玉帝を討とうとしたのである。そこを、九雷に返り討ちにされた——というのが火雲宮の行政、軍事に携わる者ならば誰でも知っている『歴史』である。

それまで、敖広と九雷は、ほとんど知らない間柄だったという。

にも関わらず、そのとき、剣を交え、九雷が自分を容赦なく斬ろうとしている

のを知って尚、敖広は九雷に青龍の力を譲渡したのだ。

赤帝君でなくとも、それは不可解な一幕である。

「……………」

赤帝君は、月に何度か未だに足を運んでいる場所に、自分と紫凜以外の者が訪れた痕跡を見て、立ち止まった。門扉が開け放たれたままになっているのだ。

錠などはないが、普段は閉ざされているので、明らかに誰かが開けたのだらう。

この先は、無縁墓地になっている。滅多に人影など見ないのが普通だ。

赤帝君は用心深く奥へと進んだが、見覚えのある後姿を見つけて妙に納得をした。

敖広の墓の前に佇む背の高い男。彼が、ここを見つけた経緯は容易に思いつく。

先日、北海龍王のクーデターの際に命を落とした敖坤を、軍部が『事故死』として、東海龍王家の墓に入れてやったのは知っている。そのときに、敖広の墓がそこにはないことに気付いたのだらう。

「貴方がここに現れるとは——」

赤帝君が声を掛ける前から九雷も気付いていただろうが、振り向くことはなかった。

そのままの姿勢で、ただ、足元の、小さく彫られた墓碑を見ているようだ。

「東海龍王家の墓に入るとは許されなかったのか」

「玉帝ぎょくていに刃を向けては、それも叶わないでしょう……」

「俺には来て欲しくなかった、という顔だな？」

「別に、そこまでは……」

と言ったが、半分は心情を言い当てられたようなものだ。

赤帝朱雀星君の、九雷に対する思いというのは、複雑なのである。仇なのか、同志なのか、そのどちらとも言えないからだ。

「まあ、いい。敖広に聞きたいことがあって来たんだが……、どうせ答えてくれないだろう。赤帝、お前、代わりに聞いていくか？」

「……？」

赤帝君が顔をしかめる。控え目に言ってもあまり仲の良くない自分にこんなこ

とを言い出すなんて——という表情だ。

しかし、赤帝君は九雷が差し出した杯をためらいつつ受け取った。

そして、暫くは無言で、九雷が持参した紹興酒を二人で呑んでいた。

敖広の好きな酒ではなく、自分の好きな酒を持ってくるところが、この男らしい——と思いつつながら、赤帝君は九雷が話し出すのを待った。

既に、時刻は夕方を過ぎて、辺り一帯は不気味な墓所の雰囲気になっているもの、九雷が居るせいかあまりそういった不気味さは感じられない。

(この男自体が、一番不気味だからか……)

と、赤帝君は思う。

九雷は普段から口数が少ないので有名だが、『物静か』という形容詞は決して似合わない。

常に、鋭くて陰気な空気を撒き散らしているというイメージが赤帝君にもある。

それが時に圧迫感のようなものを感じられ、畏怖の対象になってしまっているのだらう。

しかし、静かなのに目立つ、というのは、やはり間違いなくこの男が色んな力を持っているからだ。

「なぜかな。……最近、敖広のことをよく思い出す」

赤帝君は、あまり酒には強くない。普段も、付き合い程度でしか呑まない方である。小一時間程で、すぐに酔いを感じた。

だからなのか、そんな言葉を先に漏らしてしまった。

かつて、黄龍から分たれた四神は、それぞれの属性を高く有した四人の天界人と『同化』して四方将神という存在になった。

敖広は、その類稀なる『木』属性の素質により、まっさきに原型であった青龍と同化したのだが、それ故に、四方将神達のリーダー格として、他の三人を導く立場にあった。

上官にも平気で反対意見を述べるような男だった。

そして、緑麗が決起したとき、他の四方将神達はしばらく動静を見守っていたが、敖広だけは麒麟の存在を否定したため、玉帝に捕らわれることとなった。

緑麗と結託したわけではない。ただ、結果的にはそう見えたかもしれない。

「あの人は、天意に逆らうことになっても、決して自分の考えを翻しはしなかった。どこまでも真つ直ぐな方だった」

赤帝君は、杯に映った自分の紅い髪を見ながら語った。

かねてより、敖広の離反に心を痛めていた赤帝君は何度か、敖広を説得しに牢獄へ通った。敖広が恭順の意を示せば、命だけは助けられると赤帝君は信じていたのだ。

麒麟を否定することは、即ち、天帝を否定することである。それでは、無益な争いが起きるだけなのだ、と。

争いを起こすのは、緑麗だけでたくさんではないか。いまだって、仙界に潜伏しているといわれている緑麗の下に、天界軍の者達も身を寄せ始めているというのに――、と赤帝君は敖広に語った。

しかし、赤帝君のその好意は、裏目に出てしまった。

何度目かの説得の際、赤帝君の隙をついて敖広は脱獄し、そのまま玉座の間に向かった。

そして、あの事件が起こった。

赤帝君の脳裏に焼き付いた、敖広の死のシーンである。黒光りのする床の上に流れた、敖広の血。

その中には、冷酷な表情を浮かべた九雷も居る。

「恐らく、あるとき、敖広は見抜いたのだと思う。緑麗様が叛旗を翻した本当の意味と、それを知りながら陛下の側についた貴方の真意を」

しかし、赤帝君自身は、それを認めるのに長い年月を要した。

それを九雷も理解している。

「そうだ。俺と敖広の間に、あるとき、言葉はなかった。しかし、敖広の言わんとすることは分かった」

『成そうとしていることは同じか。なら、後を託す——』

奇しくも、九雷も『木行』を極めている。

龍族とは無関係だが、同じ属性を持つ、青龍の後継者としては申し分なかったのである。

そして、赤帝君は敖広を逃がしてしまった罪により、その後、長きに渡って幽閉されることになった。

といっても、半分は、自分で望んだ幽閉である。この悲劇の意味するところはなんなのか、理解するには長い年月が必要だ、と赤帝君は思ったのだ。

玉帝は、そんな赤帝君の心情を凶って、彼に『蟄居^{ちつきよ}』を言い渡した。

「幽閉されている間、私は、あの人を助けることのできなかった自分を悔やんだのと同時に、なぜ、あの方はああも頑なだったのだろう、と考えた。だが、頑なだったのは、私だったのだ。助けられるはずだと、誠心誠意話せば分かってくれるはずだ、と、あの方の誇り高い信念を理解しようともせず、結果、私はあの人を死に急がせた……」

「……」

九雷から見ても、敖広と赤帝君は、非常に対照的だった。

更に不思議なことに、この二人の性格は、それぞれの力の質を入れ替えたように映る。

水神である青龍を宿した敖広は、誰にも触れることを許さぬような熱い魂を持

ち、炎を纏う朱雀を宿した赤帝君は、常に内省的だ。

「私にとって、あの事件は悪夢以外のなにものでもない……。なのに、最近になつて思い出すのは、不思議と、楽しかった日々のことばかりだ」

かつての四方将神達が揃っていた頃は、真武君と夜な夜な戦史について語り合
い、無茶をしでかす白帝君を叱っていた。

そして、なによりも、自分に武術を始めとして、色んなことを教えてくれた敖
広は、赤帝君にとっては、かけがえのない存在だった。

「それは、多分……」

と、ずっと俯いていた赤帝君が顔を上げて、九雷を見た。

「いまの状態が万全ではないとはいえ、再び四方将神が揃い、緑麗様がここに
帰ってきて下さったおかげだと思う」

「……」

「ならば、私の罪はもう許されたのだろうか……」

自問のように呟く赤帝君は、杯を置いて、敖広の墓の前に立った。

九雷は暫くそれを黙って見ていた。

赤帝君の真面目さは、いつも彼自身を縛るものでしかない、と九雷は思っている。損な生き方だ、とも。

しかし、彼はそれ以外の生き方はできないのだろう。

「罪を罪だと思ふ者にとって、それはもはや罪ではない——」

「……？」

「俺の言葉じゃないが、そういうもんだろう」

赤帝君は、驚きを持って微笑した。

まさか、この男の口からそんな言葉が出るとは思わなかったし、その言葉に救われるとも思わなかったからだ。

「貴方が敖広に聞きたいことというのは……？」

「俺は、青龍の力と共に、敖広の記憶の一部も受け取ってしまったらしい。その中に、敖広が常に敵視していた人物が居る。しかし、生前、敖広はその人物と諍いを起こしたわけでもないし、世間的に見ても特に危険人物というわけでもない。それがずっと引っ掛かっている。敖広はなぜその人物を敵視していたのか——」

「……？ 誰です？ 哪咤太子ですか？」

「いや、違う」

なら他には思い当たらない、という顔をした赤帝君に、九雷はいつもの嘲笑の表情を向けた。そんな分かりやすいものではない——と言いたげだ。

「まあ、いいさ。今日は帰ろう。邪魔したな」

「……… 晩安」

赤帝君は、少し喋り過ぎたと後悔をしている。

九雷が去った後の墓地は、いつもより不気味な寂寥感が漂っていた。

3 ミニ黄龍の謎

九雷が帰宅したとき、沙龍は水雲宮すいいうんきゆう 最上階のテラスで白い大きな虎を相手に、唸っていた。虎は白帝君である。

「よオ、オカエリ、つーか、お邪魔してます？」

「……なぜお前がここに居る」

その感情の一片も入らない言葉に、白帝君はうんざりした。

「いきなりご挨拶だなく。阿姐アーチエもなんか言ってるやってくれよ。大体、ここは、旦那の家じゃないだろお？」

「……ウーン」

沙龍はなんとも曖昧な微笑みを九雷に向けるだけである。

デツキ・チェアの周りには空の酒瓶が数本転がっていて、ここでも酒が酌み交わされていたようだが、どうやら酔っ払っているのは白帝君だけのようにだった。

そして、二人は中断されていた続きの会話を始める。

「……いつも取り次いでくれる子は？ ホラ、くりくり目の可愛い子おー」

「あの子はキサさんのファンだから、ダメ」

「ちえー、なんだよ、ソレ、不毛じゃねえ？」

「大体、悠花ゆうかは、お前の毒牙にかけていい年齢じゃない」

「じゃ、あの、キレー系のお姉さんは？ 庶務担当の」

「紗衣さい？ あれは手強いぞ。それに、人妻だ。やめておけ」

「ンだよ、堅えなー。人妻って、俺的には萌え要素なんだけどなー」

「別に口説くのはお前の勝手だが、紗衣の好きなタイプは阿哥アーク（赤帝君のこと）だからな。無理だろう」

「ちえー、どーしてアレがいいかねえ、ただの堅物だったのに。……じゃ、あの子は？」

と、こんな不毛な会話をずっと続けているのだった。

つまり、白帝君が沙龍に、誰か女の子を紹介して、と言っているらしい。

「ドクターにでも紹介して貰えば？ 交流広そうだし」

「天真大夫う……？ 悪いけど、俺、あの得体の知れない怪しい感じが、どーも好きになれねえんだけどよ」

「じゃ、西海龍王殿は？ 噂じゃ、天界の半分の女の子の連絡先を知ってるのか」

「あのオッサンに頼むのは、俺のプライドが許さねえ」

「……つたつて、殆ど新参者の私に頼むのは無理があるだろう。お前の注文を聞き入れてたら、ただでさえ少ない手持ちはすぐ底を尽く」

「別に、俺、そんなストライク・ゾーン狭くないぜ？ 年は上だろうが下だろうが、構わないし、背なんて、ちっさくても、デカくてもいいし。……あ、でも、胸はやっぱ欲しいかな。できたら、こー、普段は真面目なんだけど、たまに見せる仕草が妙に色っぽかったりすると、サイコーで……。あ、あと、俺的に拘りたいのが、声ね、声。前、付き合ってた彼女が、歌、巧くってよー。綺麗な歌声つていいよなー。あ、でも、俺は阿姐のすんげー歌を聞いて育ったから、あれ以外ならホント、なんでもいいワ、うん」

「……………」

沙龍は大袈裟に溜息をついた。

緑麗が音痴なのは知っているが、自分は『すんげー歌』と言われるほど酷くはないはずだと思っている。

「あと、贅沢言うなら、色白が好きかなー。一見、病弱そうに見えたりすると、萌えるっつーか。低血压っぽいのか、アンニュイな雰囲気？」

「……どこがストライク・ゾーンが広いって？」

「沙龍、そんなバカ虎放っておけ」

二人の会話を、聞くとはなしに聞いていた九雷が呆れて声を掛けた。

「そりゃ、旦那はイイよなー？　こうやって、スイート・ホームに帰ってくれば、最愛のハニーが出迎えてくれるんだからよ。俺なんて、侘しいもんよ？　誰かさんに飛ばされた赴任先じゃ、一人寂しく晩酌したり、一人寂しく通販で入浴剤買ったりしてんだからよ」

買ってるのか、そんなもん……と、沙龍は思ったが、口にしなかった。大きな欠伸が出る。

既に、『本日の稼働時間』はとつくに過ぎているのだ。

眠たそうな目を九雷に向けた沙龍は、「後を任せる」という顔でその場を去った。

しかし、白帝君は九雷にこそ用事があったらしい。

「ジジイはまだ見つかってないんだが、関係者の一人は見つけた」

と、酔いの覚めた顔で言った。

「陸^{りくあつ}庄か？」

「やんなるね。なんで分かるんだよ」

「お前とは頭の出来が違うだけだ」

「フンだ。……まあ、そういうわけで、人界経由で追っかけてみるワ。今日は様子見とその報告に来ただけなんだが……、そういや、阿姐の異変ってなんか分かったのか？」

白帝君が言っているのは、沙龍がミニ黄龍に変身してしまったことである。

それは、秘書官の汎々から聞いた。

「そうだな……、いまのところ判明したのは、仙桃のせいかもしれない、ということだけだ」

九雷と天真が調べた範囲では、沙龍はあのミニ黄龍の姿に変身する前に、普段は口にしないはずの仙桃を食べたらしい、ということである。

水雲宮の厨房見習いの健一は、それを聞いてひどく狼狽して、謝っていたが、健一にミスはない。

「それと、五行砲の発射装置で五行の力を全て持っていかれたのも、原因の一つだろうと天真は言っていたな」

「フーン……。しかし、それくらいなら、いまんとこ笑い話で済むんじゃないかねえの？ 二、三日で元に戻るんだったら、これといって害はないだろうし」

「害があつてからじゃ遅いだろう」

「まあ、弱々な阿姐は旦那がつきつきりで護ってやりやいいじゃん」

と、白帝君は嫌味のつもりで言ったのだが、九雷は「当然だ」と真顔で答えた。

ヤレヤレ、嫌味も通じねえ——と、肩をすくめる。

「この件については赤帝がなにか知っているはずだが、お前こそなにも聞いてないのか？」

「えー？ 阿哥がー？ 俺はなにもしらないけどー？」

白帝君の返答っぷりは、いつもと変わらない。例え知っていても、知らなくとも、同じように答えるのが白帝君なのである。

だからこそ読めない。

「んー、でも、だったら、時期が来たら話してくれるんじゃないやねえ？」

それを待つのが嫌だから聞いているのに、と、九雷は忌々しく思った。

4 木佐と白帝君

赤帝君から『西方』の話聞いた翌日である。

今日は公務員時間で帰宅できた、と木佐は久しぶりの我が家を見上げた。夕飯も自炊できる時間だな、と思う。

木佐の屋敷は、元々は木佐の前世である真武君が使っていた四神府の官邸で、ずっと放置されていたものを、いまは木佐が自分の住みやすいように色々改築したりしている。が、基本的な内装や外観は変えていない。

四方将神の屋敷にしては、かなり控え目な色合いでまとめられており、木佐も気に入っているのだ。

ただ、一人暮らしには大きすぎる屋敷なので、もう少し縮小したいとは思っているが、あまりそういった時間は取れずにいた。

一時期に比べればだいぶ落ち着いてきたものの、まだ覚えなきやいけない仕事や、荒れ放題になってる任地の整地にめどがつかっていないのだ。

(我ながら、よく働いてるよな……)

と、木佐は思う。

東京で暮らしていた頃は、よもや自分が異世界で公僕になるなどは夢にも思わなかった。

高校を卒業してからは沙龍と二人で興信所を経営していたのだが、主に沙龍の雑な仕事ぶりのせいで、赤字になることも多かった。

電気やガスを止められるのもしょっちゅうだったので、公園墓地に落ちていた蠟燭を拾ってきて、それに火を灯し、色んな内職仕事をするはめにもなった。

そのとき、ボールペンの組立てはもう二度とやらない——と思ったものだ。

しかし、そんな貧乏生活も、大して苦にはならなかった。それは、常に、隣で「なんとかなるってー」と呑気に言っている沙龍が居たからである。

木佐にとって、沙龍は『赤字仕事しかない無能な従業員』だったが、同時に、無くてはならない、頼もしい存在だったのだ。

当時、松木ゴローは、木佐と沙龍のことをよく『三蔵法師と孫悟空』と言っていた。勿論、木佐が三蔵法師である。力技だけが取り得で、考えなしに行動して

は失敗する沙龍を、木佐がいつも説教するという図だ。

その関係は、住む世界を違えたいまでも続いているわけだが、自称『デレデレの熱愛中』の沙龍は、伴侶とも呼ぶべき人を得て、最近では木佐に面倒をかけるようなことも少なくなっていた。

正直言って、それを喜ばしく思う自分と、幾ばくかの寂しさを感じる自分が居る。

巢立ってしまった雛に対する親鳥の気持ちなのかもしれない——いや、もしかしたら、雛は自分の方かもしれない、とも思う。

「……で、なんでここに居るんだ、君は。人界に行ってたんじゃないのか」
つい先週も、鎮江楼に夕飯をたかりに来たはずの白帝君が、ニコニコしながら玄関前の階段に座っているのを見て、木佐は溜息をついた。

今日はせっかく早い時間に家に帰れたというのに、また、この大飯食らいのおさんどんをしなければならぬのか、とちよつと憂鬱になる。

「人界仕事も色々ストレス溜まんのだよー。だから、玄ちゃんの作るご飯を食べて英気を養おうと思って！」

昨夜は水雲宮、今日は木佐の屋敷、と、それぞれ夕飯時を狙ってやって来る。

「僕がいつ、君のために夕飯を作ると言った」

「んもー、恥ずかしがり屋さん！」

そう言っつて、木佐に気軽に抱きついてくる白帝君は、どこかラテン民族の血でも入ってるのではないかという勢いだ。

どっちにしろ自炊はするつもりだったから、作る量を二倍（いや、十倍くらいかもしれない）にすればいいだけの話なのだが、それにしても、無遠慮極まりない男である。

「白帝君、言っておきたいことがある」

木佐は、白帝君の腕をキツチリ外して、言っつてやった。

「関白宣言？」

「……。なんでそれを知っている。いや、違う。いいか、よく聞け、白帝君」

「やだわ、改まっちゃつて！ ダーリンつて、呼んで」

あくまでもふざけ通す白帝君に、木佐は、黒い影の入った剣呑な表情を見せた。

「そんなこえー顔すんなよー。美人が台無しよ？」

「まず、僕を美人と言うな」

「えー。素直な感想なのにー」

「それから、冗談でもそんなことを言っていると、襲うぞ。僕は別に愛なんかなくてもいいタイプだ」

「……え、えっとー。いや、俺も経験がないわけじゃないんだけど、それはちよつとエンリョしたっていうか。やっぱ女の子のホウが……」

「それから、なにか機密関係の仕事をしているのは知ってるが、本来の四神府の仕事をそっちのけで、任地に全く手を付けてないというのは一体どういう見なんだ。いくら秘書官が有能とはいえ、代替が効かない部分もあるだろう」

「はあ……」

「それから、来るなどは言わないが、来る前には連絡し……」

そこまで言つて、木佐はピタリと口も足も止めた。

白帝君のなにも考えていなさそうな顔を見て、思い出したのだ。以前、こんな表情の奴に、小言ばかり言っていた日々のことを。

「馨だ……」

「え？」

「いま、とんでもないことを思いついたぞ」

このバカ虎は、信じられないことに、ひよつとすると、あのバカ友に似ているかもしれない——と思ったのだ。

（そうだ。脳天気にも、人の都合などお構いなしに押し掛けてくるところといい、小言を言っても右から左に抜けていってしまふところといい、そっくりじゃないか）

更に、沙龍も白帝君も、考えなしのクラツシャーかと思うと、実はそうでもない——というところまで似ている。

「なんとなくいままで聞きそびれていたんだが……。君と緑麗さんは、姉弟同然だという話だけど、実は本当に血が繋がってるんじゃないのか？」

そう聞くと、白帝君は意外な顔をした。

「え？ そりゃないと思うぜ？ といつても、俺は拾われっ子だから、本当のところはよく分かんねーんだけど」

「〃拾われっ子〃？」

「うん。赤ん坊のとき、西域の砂漠で泣いてたところを、やらきゆう弥羅宮（※西域の砂漠にある、太上道君の宮殿）のジジイが拾ってくれたらしい」

「それが、太上道君か。……じゃあ、本当の両親は分からず終いなのか？」

普段なら聞きにくい、こういった話も、白帝君には直接聞けてしまうのは、彼がそういうサツパリした空気を持っているからである。

同じく、出生には色々謎が多い九雷相手にはこんな風には聞けない。

「あー、多分な」

「〃多分〃？」

「うーん……、ジジイならなんか知ってるだろうけど……。実はさー、玄ちやん。俺、以前、調べようとしたことがあんのよ、ジジイには内緒で」

「両親のことを、か？」

「そうそう。イチオー、気になる年頃ン時にさ。でも、そんなとき、阿姐に一喝されちまって」

白帝君が言っているのは、いまの沙龍ではなく、勿論、緑麗のことである。

「なんて？」

「〃自分が何者かは、自分で決める。それは血で決まるものじゃない」、とき。今更、自分を捨てた両親にどんな事情があつたのか知つたところで、意味がねえって話」

「それが緑麗さんのポリシーか」

「俺も阿姐も、昔の天界じゃ、異端視されてたんだよ。いまじゃだいぶ緩くなつたけど、〃黒髪じゃないと駄目！」みたいな風潮あつたからなー」

そういった話はよく聞かすが、白帝君の口から実際に聞いたのは初めてだった。金髪だった緑麗や、この見事な銀白色の髪を持つ白帝君が、『迫害』とまではいかないにしても、かなり陰口を叩かれて育つたのだろうということは、察しがつく。

「だもんで、阿姐も、色々、思うところがあつたんだろうと思うんだよな」

「そうか……」

木佐は、ひとまず夕飯の支度を始めた。

手早く淹れたお茶だけを白帝君に出す。

白帝君は台所の小さな食卓について、それをゆっくり飲みながら、他にも色々な話をした。

名門一家出身の赤帝君や敖広と違って、自分には『太上道君の養子』という事実しかなかったが、それ故にどこの派閥に所属することもなく、自由でいられたこと。

それが、結局自分には合っていた——と言う白帝君は、確かに、火雲宮に居る名のある神々とは異なる、独特の雰囲気を持っている。

『白虎は中立を守る者』——といっただったか聞いたことがある。

それは、ほぼ間違っていない、と木佐は思う。

白帝君のこの自由な気質があったからこそ、彼は白虎と『同化』できたのだろう。

「で？ まだ？」

ニコニコしながら夕飯を待っている白帝君が、やはり、かつての同居人と重なる。

「はあ……、そういうことか……」

木佐は、金平牛蒡を作りながら、溜息をついた。

迷惑をかけられているのに、決して嫌うことができないというのは、もはや責め苦かもしれない。

「なんだよ？ 一人で納得して」

「つまり、僕はこのタイプに振り回される運命だってことだ」

なにも、ご丁寧に水雲宮まで届けなくたって、職場で待っていたら沙龍の方からやって来そうだったが、木佐は昨夜作りすぎた茶碗蒸しを手に親友の家を訪ねた。

いつも取り次いでくれる女の子が、愛想良く、最上階へのエレベーターのキーを解除してくれる。

木佐は、彼女の名前は知らなかったが、中学生くらいにしか見えないその女の子が、特別に自分を優遇してくれようとしているのは理解していた。

といっても、木佐の態度はいつもと変わらない。こんなことは慣れ過ぎていて、足元を蟻が通り過ぎるくらいにしか感じないのだ。

勿論、踏まないようにはする。が、それだけだ。

そして、最上階へ到着すると、沙龍は木佐の持ってきてくれた茶碗蒸しに狂喜乱舞したが、どこことなく元気がなさそうだった。

その理由を質すと、

「いやー、最近、なんか夢見が悪くってさー」

と、まだ寝巻き姿でコーヒーを飲んでいる。

既に昼過ぎという時間なのに、この無職プー太郎は、完全に人生舐め切っているな、と木佐は思った。

「夢？ 馨はあんまり夢なんか見ないだろ？」

「あー、そうなんだけど。なんか、ここ数週間ほど、変な夢ばっか見てる」

「よく眠れてないってことか……。昼間働けよ。そうすれば、疲れてグツスリ眠れるぞ」

「えー、ない仕事を探してまでしたくない」

「別に、外に行くだけが仕事じゃないだろ。水雲宮の掃除とか、色々あるじゃないか」

沙龍が面白くない顔をして、話題を変えようとする。

都合の悪いことは聞き流す特技は健在のようだ。

「そういえばさ、この前、九玄姐さんと、欽チャンと女三人で温泉ツアーに行くっ

てきたんだけど」

「……それがどうかしたのか」

「いや、楽しかったは楽しかったんだけどさ。乙女が揃えば、恋の話にもなるわけよ。欽チャンは離婚相手と再婚したばっかで、いまはなんかオノロケ・モードだけど、九玄姐さんは、色々キビシーみたい」

と、なにか言いたげな目で見る。

（僕にどうしろって言うんだ……）

今度は木佐が聞き流しモードに入りかける。

前世の自分が九玄と特別に親しい間柄だったのは承知しているが、いまの自分は彼女を同じようには愛せないのだ。

だったら、無関係を決め込むしかないだろう、というのが木佐の考えなのだが、沙龍はそこまでドライには割り切れないようだ。

「じゃあ……」

沈黙の数秒後、木佐はその苛立ちを吐き出すように言った。

「例えば、僕がノーマルだったら、九玄さんと付き合ってみる——とでも言うの

か？」

「うーん……、難しいテーマだね」

「別に、難しくないだろう。僕達は、前世とは別の人生を生きてるんだから、前世の因縁を引きずる必要はない」

「でも、全く無関係ってわけじゃないじゃん？ 私も最初はキサさんみたいに考えてたけど……。でもさ？」

沙龍は身を乗り出すべきか、引くべきか迷うような仕草で、結局、コーヒーを飲むだけにして、言った。

「私がいまここにこうして居るのは、百パーセント、自分の育った環境と、自身の決断とは言い切れないよな、って思うわけよ」

「……」

木佐は、沙龍自身がとまどいながらも自覚している変化を、彼もまた、複雑な心境で受け止めていた。

九雷と出会ったことで沙龍はやはり変わったのだ。

こんな風に柔軟に考えるようになったし、ある意味、脆くもなった。

「変な夢って、どういう夢だ？」

木佐は話題を変えることにした。

「ああ……、それはね、なんか、悪夢そのままっていうか、こうなったら最悪だな、と思ってることが夢になって、毎日、それが連続ドラマになってる」

「なんだ、それ」

「多分、そろそろ最終回だよ。『彼氏には浮気されて捨てられ、友人知人は死に絶え、私はどこか外国で占い稼業してる老人になってる』で、終わり」

「それが、馨の考える『最悪の人生』か？ 結構、普通に考えられる、普通の人生って気もしなくはないけど」

「ガン。そうなのか。茶碗蒸しに囲まれて死ぬる人生は、そうそうないのね……」

このお気楽者がどこまで本気で言っているのかは分からない。夢にうなされるくらい大したことないじゃないか、と、このときの木佐は思ってしまった。

「占いで思い出したけど……」

「うん？」

「前に、東京で、前世占いをしてもらったことがあっただろ？ 馨は忘れてるかもしれないけど」

「あー？ えーと、明治神宮での仕事の帰りだったっけ？ 夜中に道端で、胡散臭そうな爺さんに声掛けられたのは覚えてるけど、内容は覚えてないな……」

「馨の前世に、一人、『お姫様』が居たってのがやけに印象的だったんで、覚えてるんだ」

しかも、場所は日本でも中国でもないという。

とすれば、ヨーロッパか。

フランス人形のようなドレスを着た沙龍を想像したらかなり笑えたので、木佐はそれがインチキだと思っても、『占い料を損した』とは思わなかった。

いや、もしかしたら、あの老人は見料を要求しなかったかもしれない。そもそも、呼び止めてきたのは向こうだ。

老人は、ちよつと変わった格好をしていた。おおよそ、道端で占いをやっているような者には見えない、英国紳士風のタキシードである。

そして、沙龍と木佐を興味深そうに呼び止め、特に沙龍には並々ならぬ興味を

抱いたようだった。

『お嬢さん、何度も生まれ変わっているようすな』

そう言って、その老人に一番よく見えているという『数ある前世のうちの一
人』の話をしたのだ。それが、木佐の覚えている『お姫様』である。

「金髪で緑青の瞳——。いま思えば、緑麗さんみたいな外見ってことか。でも、
緑麗さんの時代じゃないよな。確か、中世って言ってたし」

「もしかして、キサさん、あのイカサマ話を信じてんの……？」

「いや、信じてるわけじゃないんだが、可能性として有り得るんじゃないかと
思っただけだ。実際、馨は何度も生まれ変わってるわけだし。その生まれ変わりの
の人生が、全て、悲惨にして短命——ってのは玉帝がかけた呪いの一つなんだろ
う？」

占い師の話でも、それは同じだった。

ルシアンだか、クリスだか、そんな名前だった気がするが、そのお姫様は、恋
人の裏切りに会い、その恋人によって殺されたというのだ。まだ成人前という年
齢で。

「まあ、あの話がインチキだとしても、インチキじゃないとしても、馨がそういう人生を繰り返してきたのは恐らく間違いないんだよ」

「で、その話はどこにどういう風に繋がるの？」

「その積み重なった魂の記憶が、悪夢に繋がってるんじゃないかなってちよつと思っただけ」

「えー、それもやだなー」

と、脳天気と言っている沙龍は、木佐の話信じていない。

いまの自分にとって、実用的な話をすることにした。

「あ、この前、私が火雲宮の武器庫からくすねてきた例の日本刀、なんてったわけ？」

「ああ、『大和守秀国』か」

木佐は、刀剣の目利きもある程度できる。

いつだったか、沙龍が、準国宝級の備前長船秀光を折ってしまった代わりに――

と、帯刀していたものを見せてもらったとき、その新しい刀が『大和守秀国』だと分かったのである。幕末期の刀匠、二代目角元興の作品だ。

「あれを貰ったとき、赤帝君と一悶着あつてさ。そんなもの持つな、と言われたんだけど、結局、その話も決着ついてないんだよな……」

木佐は思わず笑った。

なんだ、喧嘩の理由はそんな些細なことか——と。

「言ったのが九雷元帥だったら、素直に聞くくせに」

「そうだよ。だから、怒ったんじゃないか」

からかう木佐に、沙龍は真面目に答えた。

自分がその命を預けてもいい、と思った九雷になら、なにを言われても怒りはしない。

意見が食い違うことはあつても、その意見を言うことを許しているからだ。

しかし、傲慢な人生を生きてきた沙龍にとって、親でも恋人でもない赤帝君に口を出される謂れはない、という感覚があるのだろう。

「勘弁してやれよ。彼だって、悪意で言ってるわけじゃない。多少押し付けがましいかもしれないが、あれは純粹な善意だ」

「純粹な善意——ねえ」

沙龍には善意以外のものも感じられるが、それはいまは触れないでおこう、と思った。

話をややこしくしてもしょうがない。

「しかし、今度またあのミニ黄龍の姿になってしまったら、刀もなにもないだろう。そもそも、ペットボトルのキャップくらいしか持てないんだし」

木佐は、この前の帝都強襲に続く、水晶宮での一件において、沙龍が『変身』してしまった姿を見るや、十分間くらい爆笑し続けたのだ。

九雷の肩の上でリボンをつけてはしゃいでいる小さな龍が、よもや長年の親友の姿だとは。

笑いこける木佐に、少しくらい驚くとか心配とかしろ、と沙龍は言ったものである。

「そうなんだよね。またあの姿になると困るんだけど、ドクターにも原因とか分からないらしいし……。あ、でも、いつなってもいいように、欽ちゃんにリールごとリボンは貰ってきた」

「なんで、そうきん奏欽さんだけ、そういう神がかりなことができるんだ？ 『二行マイ

スター』だからか？」

「いや、それも違うみたい」

龍の姿の沙龍に、人語を喋らせることができるのは、いまのところ、奏欽だけである。

同じ龍族で、同じ『二行マイスター』である敖閏にはできなかつた。
ということは、龍族や『マイスター』は関係ないということになる。

「五行術の質の問題なんじゃないの？ 私にはよく分かんないけど」
とりとめもなくそんな話をして、気付けば夕方になっていた。

沙龍の言う『悪夢』は、ほんの二週間ほど前からの話である。

ところどころ焼け野原になってしまった帝都が素早く復旧して、しばらくしてのことだ。

原因はこれといって思い当たらないのだが、木佐の言うように、『前世の実体験』がそのまま悪夢になっているのだとしたら、あまり気分のいいものではないな、と思った。

沙龍がブランチのために階下に行くと、健一が一休みをしていた。

大きな厨房の脇にある、小さな休憩室で飲茶をしているようだったが、主に蒸籠の中身を食べているのは小龍の方だった。

「おやつどきになると、来るんですよ」

と、健一は苦笑して、桃饅を頬張っている小龍を軽く突付いた。

アイドルとまではいかないが、小龍はこうして、皆に可愛がってもらっている

ようだ。

「桃饅か」

と沙龍が言ったとき、二人は同時に思い出した。

以前、健一が作ったという『仙桃入り桃饅』が、沙龍が変身してしまった原因の一つじゃないか、と天真が指摘して以来、健一はこの話題になると、恐縮しなくなる。

その度に、沙龍の方が健一をなだめる、というやりとりになるのだ。

「いや、何度も言ってるけど、健ちゃんのせいじゃないし、別に小さな龍に変身してしまいうくらい、こんな世界に住んでる以上、想定内だ」

沙龍はこの件については、周囲ほど動じていない。

実際、崑崙の太乙の庵で初めて変身したときも、「食事ができない！」とまず最初に思っただけで、それ以外のことはほとんど考えていなかった。

我ながら、原始時代の人類並だ、とも思う。

まずは、生存本能——というわけである。

健一は「あ、これは普通の桃饅ですから」と、沙龍に勧めてから、

「しかし、あの姿じゃ、色々不都合が……」

「ウム、まあ、それは元帥が我慢すればいいだけなんですかにを？ とは聞かず、健一は思わず下を向いた。

普通の、奥ゆかしい少年少女の反応は、こんなものである。

沙龍がちよっとオープンなだけなのだ。

「いただきまーす。……んむ、この桃饅も美味しい」

「これは、オレが実験的に作った『キナコ入り』です。紗衣さんにも食べてもらったんですけど、評判良かったです」

「ふーん……。けど、やっぱり前に健ちゃんが入れてくれたやつの方が美味かったなー……」

「そ、そう言って下さるのは非常に嬉しいんですが……」

あれ以来、沙龍には『仙桃厳禁令』が出されている。

天真は、仙桃のことを色々調べてくれているようだが、あの桃は収穫時期によってもかなり成分が違おうし、細かく言うなら、木によっても違おう。

西華の桃源郷でしか採れず、仙道達にとっても希少価値の桃なので、仙界内で

すら数もそんなには出回っておらず、天界の市場で手に入ることも滅多にない。

だから、よっぽどのがない限り、沙龍の口に入る心配もないのだが、この前健一が作ってくれた桃饅は素晴らしく美味だったので、もうあれが食べられないのかと思うと、それはそれで残念である。

「多分、美味しかったのは仙桃のおかげだと思います。あれを越える味を、今度は特殊アイテムに頼らず、普通の材料で作れるように頑張りますよ」
健一がなかなか頼もしいことを言うので、沙龍はにっこりと笑った。

「頑張れ、未来の巨匠」

小龍は、蒸籠の脇で眠りはじめていた。

お腹が膨れたら昼寝かい——と、沙龍は、この役立たずのペットは誰かみたいだ、と思う。

「そういえば、紗衣は？ 姿を見ないけど」

「ああ、紗衣さんなら、さつき市場に行ってくるって……」

「……フム」

沙龍は、ふと、二週間前の今日のことを思い出した。

毎週日曜日、帝都の城下町では『日曜日』が開かれる。通常の食材から日常雑貨、はたまた骨董品まで、色んな屋台が並ぶので、市のある日は、ちよつとしたお祭りのような様相を呈している。

紗衣は、この日曜日によく出掛けているらしい。

水雲宮の庶務担当としての、買い出し仕事である。

そして、二週間前の同じ日曜日、暇をもてあましていた沙龍は、市場に行くという紗衣に付き合つて、出掛けた。

悪夢を見だしたのは、その辺りからだ、と思つたのだ。

(そういえば、あのとき、変な人に会つたな……)

二週間前の日曜日にて、紗衣は通り向こうに目をやって、表情を変えずに小さく言った。

「……緑麗様、ちよつと警戒して下さい」

訓練を積んだ者特有の言い方である。

要注意の危険人物を、近くに見つけたらしい。

沙龍は、やはり周囲に気取られることなく、了承の意を紗衣だけに示したが、辺りを窺ってもそれらしき人物も気配もない。

(……?)

天界住民達は、人間と同じ気配は持っていない。

だから、沙龍は少し特殊な、独自の方法で彼等の気配を探るようにしているが、それでも、沙龍のセンサーになにも引掛からない場合がある。

それは、相手が相当のキャパシティを持っている場合である。

四方将神クラスになると、近くまで来られても——最悪、背後にいきなり立たれたとしても——沙龍はまず気付けない。

しかし、その日は、沙龍が気配を探し当てる前に、向こうの方からアクションを起こしてきた。

自分を見て、オーバーに破顔一笑する、見知らぬ男が居る。男はフランスパンを抱えたまま、沙龍に近寄ってきた。

「これか」と沙龍は思ったが、特に危険な感じはしないし、殺気の類もない。

むしろ、これは真逆の、体全体で喜びを表現している、嘘偽りのない姿である。

「ヒヤー、もしかして、緑麗ちゃん？」

両手で抱えた紙袋に、大きなフランスパンが二本ささっている。

なにかをするにしても両手が封じられているのだから、こちらの方が有利だ――と沙龍は思った。

「……もしかしなくても、そうだが？」

沙龍は、警戒心をわざと見せた状態で、答えた。

「可愛くなっちゃってー！ いやー、驚いた！ こんな縮小サイズの緑麗ちゃんに会えるとは思わなかったなー」

「……」

「なんか、その方が絶対いいよ、うん。前も美人だったけどね。でも、僕はこっちの方がいいなー。あ、いや、僕がロリコンだから、という意味じゃなくて」

いきなり砕けた口調で馴れ馴れしく話しかけてくるのだが、沙龍は警戒しつつも、嫌な気はしなかった。

そんな風にはつきりと、『今の姿』を讚美するのは、九雷以外では初めてだったからかもしれない。

沙龍が黙ったままでいると、フランスパン男は「あ、そうか」という顔をしたら。

「前の記憶はないんだよね。じゃ、名乗っておこうかな。僕は魁星^{かいせい}。よろしくね」

斜め背後では、紗衣が多少の緊張を解いたようだ。

沙龍も、とりあえず命の危険云々はないな、と思った。

「僕もしばらく帝都を追放されててね、つい最近戻ってきたんだよ」

「追放……？」

その言葉に再び緊張を強いられたが、魁星と名乗った男は完全にリラックスしている。

沙龍は改めて、その全身をくまなく観察した。

背格好は、どちらかというところ、逞しくない方の部類に入る、文科系。顔の造りは、ごく普通に整っていて、特に強烈な印象もない。

あまり勉強せずに学生生活を過ごし、一流メーカーに就職してからも、仕事は適当にやっつけ、週末デートに重きを置く、スチャラカ・タイプ——に見える。

『追放』という言葉からはかなり遠い場所に居そうだが、その理由は、後で紗衣に聞いて、納得した。

「魁星様は、近衛府に居た方なのですが、要するに不倫沙汰を起こしまして……」

「不倫で『追放』？」

量刑としては重すぎる気がするが、当時の時代背景を考えれば、姦夫姦婦を重ねて四つ（注1）にされなかっただけでしたたのかもしれない。

しかし、魁星の不幸は、時代ではなく、不倫相手の夫君にあった。

当時かなりの権力者だった夫君は、怒り狂って魁星を死刑にしようとしたらしいが、なんとか命だけは助かったらしい。

追放の刑期はおおよそ千年と相成った。

その刑期はとつくに終えていたらしいが、今回、帝都に戻ってきたのは、家督相続のためという噂がある、と紗衣が教えてくれた。

しかし、説明を聞いても、沙龍はまだ納得していなかった。

「特に警戒しなくちゃいけない人でもなさそうだったけど？」

そう言うのと、紗衣はしばらく黙ってから、言った。

「九雷様と、あまり仲の良くない方なので」

「ナルホド」

沙龍はやっと得心した。

あのスチャラカで軽い感じは、九雷にとっては、ゴミにしか見えないのだろう、と。

その日は、魁星に会ったこと以外、特になにもなかったはずだ。魁星との立ち話もせいぜい五分程度のものであったように思う。その数日後、魁星は水雲宮に届け物をしにやって来たらしいが、沙龍は留守だったので会わなかった。

(さてと、お腹もいっぱいだし……)

健一が仕事に戻ったので、飲茶もお開きとなり、沙龍も最上階の寝室に戻って

来た。

（お昼寝でもするか）

また悪夢の続きを見るかもしれないが、今日で最終回なら、さっさと終わらせるためにも、寝るべきだ。

などと、自分勝手な理屈で、天蓋付きのベッドに潜り込んだ。

注1……日本の中世武家社会での話。

九雷はここ数日、何度か、夢にうなされているらしい沙龍を起こした。

うなされている、という表現では済まされないような、実際に酸欠でも起こしているかのような様子に、九雷は最初からなにかがおかしい、と感じていた。

しかも、一度や二度ならともかくとして、ほとんど毎日なのである。

となれば、過保護な恋人でなくとも、さすがに心配になってくるものだが、当の本人は毎度、「あー、夢でよかった」というアクションくらいしかしないし、夢の内容を聞いても、「忘れちゃった」と言う。

それが、半分は自分に心配をかけないための嘘なのだろうと九雷は勘付いていたが、はっきりと寝言を言うわけでもないのです、夢の内容は九雷にも分からない。

「沙龍……?」

まだ夕方にもなっていない時間だったが、水雲宮の最上階、天蓋付きのベッド

に沙龍は横になっていた。

休日の午後ではあるが、九雷は仕事帰りである。

上着を半分脱ぎながら、そのベッドに近付いた。

また、うなされているのではないか、と思ったからである。

九雷には、一つだけ、気になることがあった。

先週、陽輝の口から、嫌な名前を聞いたのだ。

「さつき、朱雀門の前で魁星に会ったぜ」

「……なんだって？」

俄かに目を吊り上げた九雷は、それが条件反射のようになっている。

その名前には、百パーセント嫌なイメージしかないのだ。

「ほー、お前にしちや、珍しい。もう知ってるかと思っただが。確か、どこだかの細君に手出して、追放になってたよな？」

「俺としては永久追放の嘆願書を出してもいいくらいの男だったが……。戻って

きたのか」

「魁星って、アレだよな？ 卒業試験のときに春画を描いて落第したヤツ」

その逸話は、士官学校では未だに語り草になっているが、彼に関する話は、それだけではない。

未亡人の女性教師に手を出すわ、定期試験の結果を賭けの対象にして停学処分を食らうわ、朝の修練を紙人形に代理出席させるわで、おおよそ、若者の考え付く遊びと悪さをやり尽くしていた。

しかし、当時、魁星は『冗談を本気でやる酔狂な男』として、それなりに知名度があり、信じられないことに、結構人気もあった。

元々の性質が陰湿ではなかったからかもしれない。

悪事を働くにしても、そこには、『自分も周囲も楽しむ』という彼なりのポリシーがあったようで、不思議と、彼を恨むような者は居なかった。

しかし、当時、先帝の血を引く者として、恥ずかしくない実績を示すことを強いられていた九雷にしてみれば、魁星はただの頭の悪い享樂的な男にしか見えなかったし、事実、そういう扱いをしていた。

つまり、完全に無視、である。

だが、魁星がいつも騒動を起こしていたのは、学年長の九雷に窘めて欲しかったからだろう——ということとは、当時、周囲に居た者には分かる。

だから、陽輝は言ったのだ。

「考え過ぎかもしれないねえが……、奴さん、お前に復讐でもしに戻ってきたんじゃないかねえの？」

その可能性はないとは言い切れない、と九雷も思った。

魁星を追放処分にしたのは他ならぬ九雷なのだ。魁星の方に非があるとはいえ、逆恨みされてもおかしくはない。

そして、晴れて帝都に戻ってきた魁星が、どうやって自分に復讐するのか、と考えた時、一番ターゲットになりやすいのが沙龍である。

いま、自分の眼下でスヤスヤと眠っている沙龍は、なんの悪夢にも邪魔されていないようなので一安心したものの、すぐにこれは眠らされているのだということ

とに気付いた。

「……!?!」

案の定、いくら揺り起こしても目を覚まさない。

完全に力の抜けている沙龍の小さな体は、いま、なんらかの術の支配下にあるようだった。

五行術ではない。

木・火・土・金・水——という、五種類の、自然界の元素を基盤とした五行の力は、原則として、物理的な効果しか生まない。

だから、いま、体は無傷のまま、仮死状態のようになっている沙龍は、精神的な負荷を受けているのだと考えるのが、正しい。

九雷は険しい顔になって、階下に降りて行った。

そして、紗衣と悠花に話を聞けば、確かに沙龍は魁星に接触した、というのである。

二週間前の日曜日だ。

さらに、その数日後、魁星は水雲宮を訪ねてもいる。なにかを届けにきたらし

いが、そのときの取次ぎは悠花がした。

「なんだって!? あの魁星を水雲宮に入れたのか!？」

普段、九雷は理不尽なことでは怒らないし、そもそも声を荒げることがないので、悠花はその剣幕に怯えた。

「奴は、『猊使い』なんだぞ!? 沙龍がいま目を覚まさないのは、魁星の仕業に違いない!」

九雷の怒声の前に、悠花は身を縮めるようにして竦む。

「お待ち下さい、悠花はなにも知らなかったんですから、そんなにお叱りにならずとも!」

紗衣が庇うように前に出ると、九雷はその紗衣ですら睨んだ。

「だとすれば、従業員に注意喚起するのはお前の仕事だろう。そのミスを認めるとでも言うのか?」

その冴えた声だけでも、射抜かれそうな迫力がある。

軍部では、こんな風に嘲笑の消えた九雷に逆らえる者など居ない。

しかし、紗衣は負けていなかった。

怖くはないと言えは嘘になるが、紗衣にとってはそれに勝るものがあるのだ。

「ええ、それは確かに私の不注意でした。出先で魁星様にお会いしたことも、九雷様に報告しておけばよかった、と悔いてますし、その私のミスのせいで緑麗様の身になにかあれば、お叱りでも懲罰でも、甘んじて受けます。ですが、九雷様！」

「なんだ」

「私は緑麗様の部下です。貴方の一方的な指図は受けません！」

キツパリと言い切った紗衣に、九雷は眉をひそめて黙った。

確かに、紗衣は軍属ではないから、九雷の命令を聞く義務はない。緑麗に対する忠義心だけで、ずっと水雲宮の管理をしているのだ。

「あの……、お叱りなら、私が……っ」

半泣きになった悠花が、おずおずと口を挟もうとしたとき、ひどく間の抜けた声が出た。

「なにを玄関先で騒いでるんですか」

天真が、小龍と共にその場に現れたのだ。

小龍がいつ天真を呼びに行ったのか、または遊びに行ったただけなのかは分からないが、いいタイミングである。

天真は、一目で往診のスタイルだと分かる、白いコートを羽織っていた。

「九雷、貴方は少し冷静になりなさい。公主のことになると、これだから、もう、困っちゃいますね」

「……」

そう言われては、九雷はなにも言えない。

しかし、三人三様、緊張感漲っていたその現場に、温和な天真の登場で気が緩んだのか、悠花はとうとう泣き出してしまった。

「て、天真大夫っ、緑麗様を……っ、お願いします！」

「ええ、分かっていますよ。大丈夫ですから、泣かなくてもいいんですよー」

と、天真は、泣きじやくる悠花の頭を撫でてから、最上階へと赴いた。

「『夢封じ』ですね。間違いありません」

天真は、沙龍の開かない瞳に手を乗せて、しばらくした後、そう結論した。

『夢封じ』とは、対象者の夢を支配し、自由にどんな夢でも見させることができ、また、見させないこともできる、というものである。

術者が夢を支配している間、その対象者は眠り続けるので、周囲が気付かなければそのまま衰弱死することもあるだろうが、沙龍の場合、ひとまずその心配はなくなった。

「ここまで完璧に、対象者の意識を夢の中に封じ込めることができるのは、魁星以外に居ないでしょう。それにしても、見事なものです」

「感心してる場合か」

九雷は既にテラスで黒焰虎を呼んで、乗り込もうとしていた。

「……で、貴方は魁星を一発殴ってから、ここに連れて来るつもりなんですね」

「俺がそんなに優しいと思ってるのか？ 天真」

「いえ。『死ぬ方がマシというくらい目の目に合わせてから、連れてくる』の間違いでした」

天真がシラツと言うのを背中であいて、九雷は水雲宮を後にした。

術者本人に解除してもらわなければ、沙龍は永遠に目覚めることはない。

それを九雷も知っているので、魁星を殺すことはないだろうが、解除させた後で殺すかもしれない。

天真は、お茶の用意をしながら、ため息をついた。

(まあ、魁星の場合は、愉快犯だと思っうんですけどね……)

一方、異空間のような場所に閉じ込められた沙龍は、先日の井戸端会議の続きのような会話をしていた。

「いや、参った参った。こんな事態は予想もしてなかったよ。ホント、困ったね」

沙龍が『一見、スチャラカ・サラリーマン』と評した魁星その人が、あまり困った様子もなく、「困った、困った」と言っている。

ここはどこだ、と聞けば「夢の中」と答えるし、なぜこんな事態になった、と詰問すれば「ちよつと失敗しちゃったみたい」と言う。

どこまでも軽い男のようだ。

「僕までこっちに飛ばされるとは思わなかったよ。イヤ、参った、困った。ホント、ゴメンね、緑麗ちゃん」

沙龍はもう職業病のような手つきで、無意識に、腰回りを手で探った。

が、そこに、期待していた聖魔剣はない。

「where (どう) と、how (どうやって) は分かった。だが、私が一番知りたいのは、why (何故) だ」

沙龍は、水色の壁紙に沿って置いてあるベンチに座りながら聞いた。

魁星の言う通り、この小児科の病室のような部屋が『夢の中』だとすれば、自分もまた、精神体のようなものだろうと沙龍は思った。

なら、ここに物質は存在しない。

しかし、確かめるように座ったベンチは、ちゃんと木の感触がしたし、武器はないものの、寝る前に着ていたはずの単衣もちゃんと着ている。

魁星は、というと、出窓に置いてある熊のぬいぐるみを手にとって、もてあそんでいた。

「いや、だから、ちよつと『夢封じ』に失敗しちゃってー。ゴメンね、緑麗ちゃん」

と、熊の頭を下げるようにする。

「違うな。それはhowの答えだ」

「……うん、そうなんだけど」

笑って誤魔化す魁星は、まともに答える気はないらしい。

沙龍は、改めて、この歪んだ部屋を観察した。

天井も床も壁も、曲面のようになっていて、遊園地のびっくりハウスの中に居るような気分である。

月や星のマークがいつぱいついた壁紙や、そこら辺に無造作に転がっているパ
ンダやアヒルのぬいぐるみは、いかにも子供部屋といった感じだが、よく見れば
簡素な白いパイプ・ベッドや、消毒用の洗面器のようなものがある。

この空間に漂っている冷えた空気からしても明らかにここは病室なのだろう。

「どうして——か」

魁星が、沈黙の延長のように呟く。

「僕も知りたい。どうしてここが病院なのか」

「……?」

「ここはね、緑麗ちゃんの『最初の記憶』のはずなんだよ。いまの君ではなく、
僕の知っている、近衛隊長の地位をあっさり断った方のね」

「病院で生まれたんだとしたら、別に不思議じゃないと思うけど……？」

「……うん、そうだね」

「……？」

魁星の意味不明の言葉が妙に癪に障ったが、沙龍はずっと表情を変えずにいた。

そして、一通りの観察は終わったとしても言うように、ベンチから立ち上がる。

「元帥との間になにがあったのかは知らないが、私を巻き込むのはNGだと知って、敢えて行動した——って感じだな」

沙龍の薄笑いが、魁星を一瞬、硬直させた。

が、その直後、魁星もまた、短く笑ったのである。

「なるほど。やっぱり緑麗ちゃんだ」

「さっきの質問を、言葉を変えて繰り返すが、お前の目的はなんだ。もし、元帥に意趣返しをしたいだけだったら、私がいまここで葬ってやる」

今度は、薄笑いを消して、沙龍は左手を目の前に掲げた。

軽く握った拳を、ゆっくり自分に向けて開くようにすると、その緩慢な動作か

らは想像もつかないような殺気が、小さな沙龍の体から滲み出てくる。

沙龍は、これを何度か、上海でやったことがある。

この殺気にあっては大の男でも及び腰になり、小者ならば確実に凍りつく。

これは『妖気』と呼んでもいいような類のものだ。

凍りつく、というのは比喩ではない。

実際、沙龍の場合、常に殺気は冷氣となつて、周囲に及ぶ。

「ま、待ってよ。『それ』はやめて、頼むから。ここで黄龍召喚なんかしちゃつたら、君も僕も、どうなつちやうか分からないよ!？」

「そんなの、私の知ったことか」

「うわ。やっぱ緑麗ちゃんだ——」

魁星は、沙龍が本気なのだ分かれると、拝むように両手を合わせた。

「ちよつと待ってつてば。九雷の焦った顔を見たいとか、本気にさせたいってのは、確かにちよつと思つたけど!　　というか、緑麗ちゃんに『夢封じ』なんか仕掛けたら、確実にそうなるだろうな——つてちよつと楽しみに思つたりもしたけど!」

「ほう……、なら、やはり死ね」

黄金色の『土行』が、氷点下の気温で沙龍の身体を包む。

この渦を巻く『氣』が、最高値まで高まれば――。

「あ、あのさ？ 緑麗ちゃんだって、少しは興味があるんじゃない？ 彼が感情的に喚き散らすところとか、見てみたくない？」

魁星が苦し紛れにそう言うと、沙龍の周囲を渦巻く『氣』の奔流が止んだ。

(お……?)

咄嗟に言ったただけなのに、結構効いたようだ、と魁星は束の間、胸を撫で下ろす。

沙龍は、腕組みをしながら、考えている。

どうやら、『九雷の焦り顔』のシミュレーションでもしているようだ。

「……フム」

そして、独り言のように頷いて、

「まあ、見たことないわけじゃないから、私はいいや。……ということ、やっぱり初志貫徹」

ニヤツと笑いながら、沙龍は掲げた左手を上空に向ける。

再び、金粉のような『土行』が流れ始めた。

「う、うわー！ マジ!? だから！ 違うって！ 九雷の話はただの前置きで—

—！ 本題は……」

「なんにせよ、私を毎日、あの悪夢に誘ったのは間違いないわけだ。それだけでも万死に値する！」

「わ、わ、わ——！」

「我、唯一のしんじゅうにして無二の存在、こうりゅうの力の一端を解放せり——！」

「キヤー！」

女性のような悲鳴をあげて、魁星が頭を抱え、床にうずくまったとき——。

ポン！

という、シャンパンの栓が抜けたような音がした。

「……?」

恐る恐る顔を上げた魁星は、白と黒のぼやけたものを視界いっぱいに見た。

目の焦点が合つてくると、それは目の前に突き出された、パンダのぬいぐるみだと分かる。

いつ、どこから持ってきたのか、それは床の上に転がっていたものだ。

そして、パンダを両手に持った沙龍が性悪な笑みで、一言。

「う・そ」

パンダは、沙龍がポイツと後ろに投げると、ベッドの上に着地した。

「……性格悪っ！ 一応、僕だって、人界じゃ『科挙の神様』とか言われて奉られてんだけど。その僕をこうもおちよくった人間は、君が初めてだよ」

「痴情沙汰で流刑にされるのが、学問の神様同盟のステータスかなんかなのか？」

そんな痛烈な嫌味もさらつと出る。

しかし、沙龍は、最初から魁星に危害を加える気はなかったようだ。

というのも、最初に会ったとき、沙龍は魁星にあまり嫌な感じを覚えなかったのだ。

その理由と、あの悪夢を見せられたことが分かってなお、その犯人たる魁星を

嫌いにはなれない理由が、沙龍にはなんとなく分かってきた。

「なに、この展開。一応、仕掛けてるのは僕の方なのに、どうして君がそんな偉そうなの」

「あの酷い悪夢を見せておきながら、よく言えるな」

沙龍が三白眼で睨みながら零すと、魁星は「ああ、そういうこと」と納得した。

「どんな夢だったの？」

「なんで聞く。知ってるはずだろう」

「いや、僕は『本人が一番恐れていること』を夢にしているだけ。実際の夢の内容までは、分かんないよ」

「ふーん……」

「多分、昔の君と、今の君じゃ、『一番恐れていること』も違うだろうね。さしずめ、昔の君だったら『世界中から酒がなくなること』だっただろうけど」

「……。それはいいとして。冒頭に戻るが、お前の目的はなんだ？」

「……」

魁星は、やはり、それには答ええない。大きく息をついて、出窓に腰掛けた。

「とりあえず、ここに長時間居てもいいことないんで、どうにかして、君を覚醒させてあげないとね。いま、君の本体は水雲宮でおねんねだろうし」

「……どうにかって、サクッと出来ないのか？」

「僕は、ただの『猯使い』なんだよ、緑麗ちゃん。猯って知ってる？」

「悪夢を喰うと言われてる猯だろ？　しかし、実際には正反対で、『悪夢を見させる』というわけか」

「いや……、どちらもできるのさ。猯を使って、どんな夢でも見せられるし、見させないこともできる。僕の使役する猯は、猯の中の王様さ。霊獣よりは格上なんだけど……、やっぱり神獣には敵わなかったようだね。僕の技量でなんとかなると思ったけど。黄龍のパワーに負けて、『猯使い』の僕まで、緑麗ちゃんの夢の世界に引きずり込まれてしまった。こんなことは前例がないんで、さつきから困ってるってワケ」

「つまり？　この夢の世界から出られる方法がない……とか？」

「い、いや、ないというか、差し当たって、僕は知らないというか……」

「……」

沙龍はいま、聖魔劍よりもハリセンかハンマーが欲しい、と思った。

このスチャラカ無責任男をとりあえず、叩いておきたい。

「さつき、『最初の記憶』と言ったな？ あれはどういう意味だ？ ここは私の夢の世界なんだろう？」

「いま、君の肉体は夢も見ずにグッスリ眠ってる状態だよ。だから、正確にはここは夢の中じゃない。緑麗ちゃんの世界でも言えばいいのかな。そして、ここに居る君は、意識体とも精神体ともいうわけだ。で、この空間は」

と、魁星は言葉を切って、歪んだ病室を見渡す。

水色の壁紙と、真っ白な床と天井。

色んな人の精神世界や夢の世界を覗いたことのある魁星だったが、こんな無機質な部屋は見たことがない。

病室には間違いないのだろうが、辺りに漂う霧か霞のような白いものは、どこか、冷凍庫の中を思い起こさせる。

転がっているぬいぐるみも新品同様で、人の手に触れられた形跡がなかった。

「君の魂魄のスタート地点ともいうべき場所だ。緑麗ちゃんの魂魄が、まっさらな状態で最初に見たもの——のはずなんだ。本当はね」

「魂魄が見たもの……？」

「でも、どうやら違う。この病室は君自身の記憶のようだ。どうしてだろう？ 魂魄は一つなのに。……しかし、とすれば、『最初の記憶』は、別の場所にあるってことか」

「……」

沙龍は、魁星の言っていることが分からない。

しかし、魁星は、その『最初の記憶』に用があるのだろう、ということには分かった。

9 沙龍を探しに

水雲宮のテラスに、鈍い音と共に男の体が転がった。

「どうということなんだ、天真。殴っても起きないぞ」

戻ってきた九雷が、魁星の体を無造作に転がしたのである。

「あ、やっぱり本人も昏睡状態でしたか」

勝手知ったる風にお茶セットを広げて寛いでいる天真は、のんびりとした口調で言った。

「『神獣の保持者』相手では、魁星も覚醒したままでは『夢封じ』ができなかったってことですね」

「では、どうすればいい？」

「うーん……、『獏使い』については、私もあんまり詳しい方じゃないんで、よく分からないんですが、要するに、公主の意識を本来の場所に戻せばいいんだと思いますよ？ つまり、いま、その意識がどこにあるのか、が問題ですね」

「どこにあるんだ？ 可能性だけでもいい」

「魂魄の深遠部分——かもしれませぬね。おいそれと、他人が行けるような場所じゃありませんが」

九雷が、すぐにでもそこに行く、と言い出しかねないので、天真は先手を打つた。

「行く方法はないのか？」

「魂魄の深遠というのは、要するに、その本人が一番知られたくないような場所ですよ、九雷。もしそこを覗く方法があつたとしても、本人が強固に阻止するでしょうね」

「……」

「まあ、いまは待ちましょう」

「待つ？ なにをだ」

「冷静に考えてごらんなさい。力ではまるで敵わないのを分かっているながら、あの魁星が貴方に本気で喧嘩を売ると思えます？ そりゃ、可愛い恨みくらいはあるんでしょうけど、本当に個人的な復讐をしたいだけなら、こんな分かりやすい

方法は取らないはずですよ」

「……」

九雷は、さつきテラスに転がした魁星の体を一瞥しながら、考える。

天真の言うことも尤もである。

しかし、魁星は『本気の喧嘩』を冗談の延長でやるような男なのだ。

「だから、愉快犯か、もっと別の目的があるような気がしますね。魁星が帝都に戻ってきたのは、表向きは家督相続のためということですが、実は違うんじゃないですか？」

ダージリンの立ち昇る香りを堪能しながら、天真は淡々と言う。

そういえば、と九雷は思い出した。

先週、陽輝から話を聞いた後、どういう経緯で魁星が帝都に戻ってきたのか、少し調べたのである。

しかし、書類上は単なる『刑期満了』とされていたし、特に不審な点も見つからなかった。

ただ、一つ、気になる点をあげるとすれば、本来、その書類に保証人としてサ

インをすべきは刑吏府の長官なのだが、末尾にあったのは、秦帝のサインだった。

それも、行政上、問題はない。

長官と同等、もしくはそれ以上の権限を持つ者なら、誰のサインでもいいのである。

が、なぜ秦帝なのか――。

(もしかして……)

九雷は、あの少年のようにあどけない秦帝の顔を思い浮かべながら、自分は彼を侮っていたのではないか、と思った。

確かに、鋭気に満ちていた玉帝に比べれば、年若い秦帝は風貌も実績も見劣りする。が、それは経験の差、年の差というだけで、むしろあの穏やかな気性は、権謀術数にはうってつけかもしれないのだ。

いま、沙龍が魁星に『夢封じ』をかけられ――もしくは、かけ損じられ――、目覚めないというこの事態を、九雷は、一連の事件と結びつけて、考えてみることにした。

一連の事件というのは、沙龍が天界に来てから見舞われた、幾つかの悪意を指す。

最初に行動を起こしたのは、元宰相だった。

沙龍を排除しようとした、その宰相の陰謀はあつけなく破れたが、次に、北海龍王がやはり沙龍を暗殺しようとした。

この北海龍王の行動は、謎が多い。

特務の調べによれば、北海龍王敖吉ごうきつは、近衛隊長の呉謙を味方につけ、手足として使い、南方軍の研究施設（通称ラボ）を買収したことまでは分かっている。

しかし、敖吉と呉謙の関わりは、使途不明金の授受の証拠しかない。

これを以ってして、呉謙が敖吉のために動いていた、と判断するのは早計だった。

事実、九雷は、そう信じてはいない。

敖吉がクーデターを起こしたのは、奏欽の証言からしても、単に権力に飢えていただけで、昔の因縁で緑麗や陽輝に恨みがあつたのは確かだろうが、あくまでも彼の目的は玉座に座ることだった、と推測される。が、その夢は叶わず、敖吉

は東海龍王によって成敗された。

話をややこしくするのが、この東海龍王である。

クーデターの最中に死んだ東海龍王敖坤は、なにか秘事に患わされていた。

その秘事ゆえに、北海龍王の起こしたクーデターを利用するのか、阻止するのか、判然としない立場を取って、最期は半狂のようになったという。

（敖坤は、恐らく、『起家』^{チーチヤ}（※本来は、麻雀用語で『親』のこと）のことは知っていたな……）

九雷は、そう思っている。

『起家』とは、軍部内で使われている符牒で、東方天界においては実力者として知られている、とある人物を指す。

敖閏がああ深夜の会談で同じ言葉を使っていたのは、彼自身、昔は西方軍大将であったからだ。

そして、九雷は敖閏からその話を聞いた時、先代の青龍、敖広が常に敵視していた人物こそが『起家』だろう、と確信した。

ただ、九雷が赤帝君に語った通り、敖広と『起家』の間には公にはなにもな

い。その上、『起家』は品行方正な人物なので、そこにまず疑問が浮かぶ。

双方の間に、個人的な怨恨があったわけではないことも、敖広の記憶を垣間見れば分かる。

なら、なぜか。

敖広は、なぜ、『起家』に目を光らせていたのか。

それが知りたくて、敖広の墓参りなどという、おおよそらしくないことまでしたが、結局、理由は分からなかった。

そして、これは偶然なのか、生前、緑麗が、なんの気なしに呟いた言葉を九雷はずっと覚えていた。

『あのジーサンは、いつか敵になる』

緑麗がなぜそう言ったのか、それは、『黄龍の保持者』としての本能としか言いようがない。

敖広の方は軍神としての直感なのか、いずれにしても、東方天界で一、二を争

う実力を持っていた緑麗と敖広が、二人して『要注意』とマークしていた人物が、いま、沙龍を亡き者にしようとしているのである。

『起家』に、黄龍や青龍に対する他意があるのか、それとも緑麗に対するなにかがあるのか、九雷にはまだ分からない。

しかし、まだなにも証拠は掴めていないが、一連の、沙龍を排除しようとする動きは、全てこの『起家』から発せられているはずだった。

そして――。

九雷は秦帝にクーデターの詳細な報告書を提出したとき、『起家』の件については未確定であることを理由に、一切触れなかった。

それを、秦帝が不審に思ったとしてもおかしくはない。

あの若き秦帝は若年ながら、ほとんど、玉帝と同じだけの仕事をこなしている。

その執務の中で、火雲宮に渦巻く不穏な空気は、当然察しているだろう。

現在、沙龍が唯一の『神獣の保持者』であることについて、秦帝自身はずっと『無問題』という立場を貫いているが、それだけでは、第二、第三の北海龍王の

出現を許すことになってしまおう。

それを、手をこまねいて見ているような無能な為政者ではない。

(だから、『魁星』なのか——)

九雷はやっと、その結論に至った。

魁星が追放処分を受けたのは玉帝よりも更に先代の治世の頃だったので、秦帝は魁星とは面識はないはずである。

が、他者の夢を自由に覗くことのできる魁星になら、秦帝の知りたいことは分かる。

秦帝はどこからか魁星の存在を知って探し当て、帝都に呼び寄せたのかもしれない。

(だとすれば、魁星は沙龍に用があったわけじゃない。奴が知りたいのは……)
そこまで考えて、九雷は顔を上げた。

「天真、やはり俺は行く。魁星がどういふつもりにしる、俺は奴の行動も能力もなにもかも信用していない。いま、沙龍の意識がある場所と、そこに行く方法を教えてくれ」

「まあ、そう言うだろうとは思いましたが……」

天真はもう諦めた顔をして、ティーカップを置くと、ゆっくりと立ち上がった。

そして、沙龍が眠っている天蓋付きのベッドまで行き、なにかを手にして戻ってきた。

「これを、持っていて下さい」

「なんだ……？」

「公主が身につけていた、緞帯（リボンのこと）です。多分、これで大丈夫でしょう」

「なにがどう大丈夫なんだ」

九雷の問いには答えず、天真は、自分の言葉を続けた。

「止めても無駄だと思っんで、止めませんが……。普通、心の奥底に持っているものなんて、誰にも見られたくないし、知られたくないようなものなんですよ。

そこに行こうと言うのだから、くれぐれも慎重に行動して下さいね。貴方が無茶をすれば、公主の精神が壊れかねませんから」

そこまで一気に言ってから、九雷が身構える隙も与えず、オモチヤのようなハシマーを思いつきり九雷の頭上に振り下ろした。

「ま、待——！」

「じゃ、いってらっしゃい」

10 灰色の世界

意識を失う前に、天真が言った言葉が、奇妙に反芻された。

『誰にだって知られたくないことの一つや二つあるでしょう』

それが、最愛の人になら尚更である。

九雷にも、確かにそういった秘密はあった。

(こんな乱暴な方法でやるなんて、聞いてないぞ……)

頭上を押さえながら辺りを窺うと、景色はなにもない。灰色一色に塗りつぶされたような、静寂だけの空間だった。

地平線もなく、地面も壁も空もない。広いのか狭いのかさえ分からない。ただの『空間』だった。

(ここは、どこだ……?)

沙龍の夢の中のはずだが、それにしてもあまりにも殺伐とされていた。五行の氣も、魂魄の欠片も、なにかの形跡も——、全てがなにもない。ここには、誰の意

識も存在していないように思える。

「……」

どこか、間違った場所に飛ばされてしまったのではないか、と九雷は思った。天真に渡された細長い布を手を持っているのを思い出し、それをしばらく見つめる。

最近、沙龍が常時身につけているそのリボンには、ミニ黄龍に変身してしまったときのために、特殊な『力』を帯びている。アダプターのようなものだった。

九雷はビロードのその黒いリボンをベルトに結び付けておくことにした。いまのところ、なにも反応はないが、これがセンサーになるなら、なくすわけにはいかない。

ひとまず、歩いた。どこに行けばいいのかも分からなかったし、本当に歩いていいのかどうかすら分からなかったが、とにかく動くことにした。

その間も、いつものように黄龍の『氣』を探してみたが、無駄だった。

そもそも、この空間には、五行そのものが存在していないようだ。

夢の世界に、自然界の力がないのは分かる。

しかし、天界に住まう者達は、五行属性というものを元から持っているのであつて、それは精神体になつたとしても、なくなるわけではない。知識や記憶と同じだ。

だから、いま、半透明の精神体として、このなにもない空間に存在している九雷は、自分の属性である『木行』の力を発揮することはできる——はず、だった。

“『猊使い』は、どんな夢を見させることも、また、見させないこともできる”
その定義を思い出した九雷は、なら、沙龍はいま夢を見ていないのだろう、と思つた。そして、少し安堵する。

『夢の世界』は、自然界の法則も、九雷の得意な理屈も、なにもかもが通用しないからだ。

まだ『普通の精神世界』の方が理屈は通じる。

「沙龍……」

風景が、変わった。

灰色の空間に、突然、ぽつかりと立体があらわれたかと思うと、背もたれのやけに高い椅子が、九雷のちようど真正面に出現した。座っているのは、沙龍である。そこだけ、『色』があった。

オークの素材を思わせるその椅子と、沙龍のクリーム色の髪、そして紺色の袍が、控え目ながらこの灰色の世界に色を与えていた。

「なにしに来たの？」

人形のように冷たい表情を貼り付けた沙龍が独り言のように言った。

じつと、宙を見つめているが、その視線は、九雷ではなく、九雷の背後を見ているような感じだった。

「ここから先は、通さないよ」

少し体を丸めるようにして、片脚をあげて椅子に座るその仕草はよく見るものだ。

「他人が行ける場所じゃないって、聞かなかった？」

「俺でも、か？」

「そう、貴方でも」

「……なら、それでもいい。無理に行く気はない。俺はお前を探しに来ただけだ」

「私を？ なぜ？」

「…… “なぜ”？」

「貴方はいつもそうやって、私を自分の手のうちに置いておこうとするけど、それはなぜ？ 本当は、自信がないから？」

沙龍が、嘲笑する。

それも、普段、自分に向けられることはないが、よく見る表情だ。

「そうでしょ？ 結局、貴方はなににも信じちゃいない。友人も、恋人も。自分自身も」

「……」

九雷は一度溜息をついてみせた。

「なにが言いたい？ 俺への文句なら、お前が起きてから聞く」

「こういう本音は、ここじゃないと言えないの。貴方だって、そうでしょ？」

「……」

「いつも言葉を飲み込んで、そのくせ、相手を追い詰めるときだけはやけに饒舌で、でも、やっぱり本音は言わない。……いや、言えないだけ。自信がないから。本当は、不安でしようがないでしょ？　こんな所まで探しに来てしまうくらい。いつか、自分のところから逃げ出してしまうんじゃないか、って。しつこく三千年も待ったのに、また、どこかへ行ってしまふんじゃないかって、不安で不安で、しようがないでしょ？」

「そうか……」

「……？」

九雷がなぜ、自分ではなく、背後の椅子の背もたれを見ているのか、沙龍は分からなかった。

その視線の動かし方が、距離を量っているのだということに気付ける技量がなかったからだ。

「まあ、それが俺の本音だと思うなら、やっぱりお前は」

「っ!?! ……どわっ!」

いきなり線のような光が走って、椅子ごと沙龍の体が真つ二つにされた——ように見えた。

「なにも分かっちゃいないってことだ——、魁星！」

が、寸での所で、首をひっこめた沙龍、いや、魁星は、九雷の二撃目を予想していなかったのか、それともよける暇がなかったのか、今度は右腕の付け根にその光の線が走ったのを、数秒後に理解した。

「……っ」

遅れて激痛が走る。

その痛みで変化の術が解け、本来の魁星の姿になった。

九雷は、魁星の右肩に長剣を深々と突き刺したまま、更に、その腹部を踏みつけた。

もし、これが本当の肉体であれば、腕は確実に落ちていただろうが、半透明の精神体では血も流れない。

ただ、痛みだけが錯覚として、魁星の体を襲った。

「ど、どこらへんから分かった？」

動けない魁星は、「この痛みは幻」という暗示をかけ、なんとか引きつった笑顔を作った。

「最初から分かっていたに決まってるだろう」

「あ、そう……。そうなのね……」

「なにか、言い残すことはあるか？ 聞く義理はないが、希望する死に方くらいは聞いておいてやる。叶えてやるかどうかは分らんが」

「ちよ、ちよっと。そこまで怒らなくなっただっていいじゃない。ていうか、痛いんですけど……」

みぞおちよりやや下の部分は、いまにも内臓が飛び出しそうなくらい重く、きつく踏みつけられているし、肩に刺さったままの剣はちよっとやそっとじゃ抜いてももらえそうにない。

しかし、おかしいな、と魁星は思った。ここでは、物理的な力は効かないはずである。

「ああ、聖魔剣か。道理で……」

魁星は、九雷が持っているのが、かつての緑麗の愛刀であることを理解した。

この特殊な剣は、精神的なダメージを与えることもできるのだ。

緑麗や沙龍が使うときはまた違った色と形状をしている聖魔剣は、いま、九雷の『木行』をベースに起動されていた。

「まあ、最悪、殺されてもいいんだけど、というか、ここじゃ死ねないだろうけど、ひとまず、僕の話を少しでも聞いてくれるくらいの理性は残っていると信じたいよ」

「そんなものは、一欠けらも残ってないな」

九雷はにべもなく言った。

「あ、そう……。いま、僕がここに居て、九雷が来たら阻止してくれ、って頼んだのが緑麗ちゃん本人だとしても？」

「……どういう意味だ？」

「あ、聞く気になった？」

「一分だけ聞いてやる」

「充分だ」

魁星は、そう言って、話し始めた。

アナウンサーのように正確に、短い時間を最大限に使って、なぜこういう事態になったのかを説明すれば、九雷もこの脚と剣をどけてくれるだろう。

11 闖入者ちんにゆうしや と管理者

話を聞いても、九雷の怒りは収まったわけではない。

魁星が望んだ、『取り乱すほどに怒る姿』はさすがに見せなかったものの、九雷はずっと怒っていた。

「だったら、最初に俺に事情を説明しておけ」

「分かってないな。内緒でやらないと、九雷の焦った顔が見れないじゃん」

九雷は、もう一度、聖魔剣を魁星の肩の奥、椅子の背もたれを突き抜けるまで差し込んだ。

「ず、ずびばせん。冗談、でずっ」

「どうせ、肉体の方は傷一つついてないんだろう。いま、ここで精神を破壊して廃人にしてやってもいいが、沙龍を覚醒させる方が先だ。案内しろ」

「いや、だから、それはもう無理だって。緑麗ちゃん、一人で魂魄の深遠部に向かっちゃったもん」

聞けば、沙龍は『自分を覚醒させてくる』と言って、その厄介な場所に行った
そうだ。

いま、魁星と九雷がいるこの灰色一色の空間は、元はあの病室である。

『ドリーム・マスター』たる沙龍が居なくなったことで、なにもない空間に様
変わりしたただけのようだ。

「沙龍に、自分を覚醒させることができるのか？」

「もし方法があるとしたら、それしかないんじゃないかと思って」

「危険はないんだろうな？」

九雷がますます怖い顔をして聞くので、魁星は視線を逸らして答えた。

「さ、さあ？ 大丈夫かもしれなし、大丈夫じゃないかもしれないけど：

…」

「お粗末な『猥使い』だな。沙龍は自分でそこへ行くと言ったのか？ お前が行
かせたんじゃないだろうな？」

「一応止めたし、なにが出てくるか分からないよって説明はしたけど、緑麗ちや
んが『他の奴に行かせるわけにはいかない』って……、まあ、そりやそうなんだ

けど」

ヘラヘラ笑う魁星に、九雷は怒りを乗り越えた虚脱感を感じる。

殺意は、むしろこの虚脱感がマックスになったときに起こった。

「さっきお前が言った話だがな、魁星……」

「うん？」

「全てがお前の作り話だったということにして、やっぱりここで死ぬか？」

九雷は、一度引き抜いた聖魔剣を、今度は魁星の頸動脈すれすれの場所に突き刺した。

「げ……っ」

一ミリも動けなくなってしまった魁星は、表情を作ることまでできない。

むしろ九雷の狙いはそこにあって、魁星のヘラヘラ笑いをこれ以上見たくないからやったのかもしれない。

「俺はな、魁星。お前の下手な芝居も、俺への逆恨みも、別にどうでもいい。問題なのは、沙龍にちよっかい出す輩が絶えないことだ」

「そっ、それをなくしたいから、陛下が僕を呼んだんでしょ……っ？ ホントな

ら、僕だって気ままに地上周遊してたかったんだってば！」

九雷の底光りする瞳は、魁星の言葉などなに一つ聞いていない。

「いい加減、煩くてな……、丁度いい。沙龍に手を出せばどんな目に遭うのか、いいサンプルになってもらおうじゃないか」

「わっつ！ ちよつと待って！ どうせ、ここじゃ殺せないって！」

「フ、心配するな。後で、改めて、死んだ方がマシだと思えるような殺し方をしてやる——」

九雷が、聖魔剣を引き抜いて、さて、どこを斬り落とそうかと思ったとき、女性の声がした。

「なんか、相変わらずというか、いや、変わった……のか？ そうだよな、前はこんな過保護モードはなかった」

「……っ!？」

九雷は瞬時に振り向いて、その女性を凝視する。

その隙に、魁星は椅子からずり落ちるようにして、九雷から一メートルほど離れた。

「りよ、緑麗ちゃん！ 頼む！ 九雷を止めて！」

息を切らしながら言う魁星を、すらりとした八頭身の美女がぼんやりと眺める。

その緑青の瞳は、いつもどこを見ているか分からないのだが、大抵、それよりも流れるような金糸の髪の方が目立つので、あまりそれは気にならない。

この世の造形美というものを一身に集めたような四肢は、精巧な機械を思わせるほどに、絶妙な比率を持ってそこに立っている。美女——には間違いないのだが、全身がひどく陽性の氣を放っているせいで、どこか中性的なイメージもあった。

彼女の、かつての名は緑麗。

「妙な闖入者が騒いでると思ったら、なるほど、この二人か。まあ、お前の用は分かってるが、魁星。九雷と仲良くしたいなら、その方法は間違ってると思うぞ」

「だろうね。でも、ほら、僕も基本はMだから、殺されるくらいが本望だったりして」

「相変わらずお前は屈折してるな。地上で色々修行してきたんじゃないのか。ちつとも根性直ってないじゃないか」

「別に、直す気ないもん。これが僕だし」

「……」

呆然と佇む九雷は、魁星と緑麗の会話を聞いていない。

ただ、この可能性を考えていなかった自分に、やはり冷静さを失っていたのだと感ずる。

「緑麗、なぜ——」

その言い方には、どこか否定的な響きさえあった。

なぜここに、かつての恋人が居るのだろう。九雷の理性は、それを許してはいない。

「馨が『意識不明』のときは、私が少し活動できるんだ」

簡単に説明する緑麗は、九雷と同じ、濃紺の軍服を身にまとっていた。

将神の頃の装束ではなく、天界軍の軍服を着ているのは、単に、在軍期間の違いか、それとも、緑麗自身がこの姿を気に入っているか、どちらかである。

が、勿論、これもまた緑麗の精神体であり、やはり、半透明である。

「私は、ずっと、ここに居るんだ」

未だ驚愕の顔の九雷に、緑麗は少し悲しそうな微笑みを見せて、言っ
てやっ
た。

「でも、馨はそれを知らない。知る必要もない」

緑麗は、沙龍を日本名で呼ぶ。

それは、沙龍が、甲斐馨として生まれたときからそうだった。

「別に、お前の味方をするわけじゃないが、魁星。結果的に助けてやる」

緑麗は今度はニコニコと晴れやかな笑顔で九雷に近付いて、その肩をポンポンと、叩いた。まあ、力を抜けよ、という意味だろうが、その直後に緑麗が取った行動は正反対のものだった。

「いいものを持ってきてくれたようだな」

まるで手品師のように、優雅でゆったりとした手つきで九雷から聖魔剣を奪うと、それを黄金の刃に変え、九雷に斬り付けたのである。

「……………!?!」

九雷はその一刀目はかわした。

かろうじて、という感じだが、九雷もこういうときに動けないほど、鈍重ではない。

「どういふつもりだ——！」

「どういふもこういふも、他人の夢の世界までずかずか入り込んで来て、歓迎されると思ってる方が間違ってる」

「九雷、無駄だよ。その緑麗ちゃんは、君の知ってる緑麗ちゃんとはちよつと違う」

「どういう意味だ!？」

二刀目をかわしながら、九雷は怒鳴った。

本来の持ち主が振るう聖魔剣の斬撃は、沙龍が使うときの比ではない。

緑麗は、当然、『土行』のマイスターである。そして、実際的な『五行行使者』でもある。

急に、この灰色の空間に、全ての五行が揃ったような氣の奔流が起こる。鈍く、時に眩しく光る黄金の聖魔剣が、縦横無尽に、躍った。

「魂魄の管理者——とでも言えばいいのかな。幽霊とは違うし、普通の生きている人の精神体や意識体とも少し違う。この魂魄が辿ってきた全ての歴史と記憶を管理してる存在さ」

魁星が説明する合間にも、灰色の空間がどんどん紙のように切り裂かれ、卵の殻が割れるように、あちこちが砕けた。

九雷は、緑麗の太刀筋を見切ることにはできるが、それ以上に聖魔剣のパワーが桁違いなので、余波までは計算できない。

掠り傷は、既に何箇所か、負った。

(なるほど。なら、煩惱も全て払拭してるのか……?)

九雷は、試しに言ってみた。

「緑麗、これがなんだか分かるか？」

「……お？」

九雷が懐から取り出したものを見て、緑麗は動きを止めた。

普段はこんなものは持っていないのだが、なにが起きるか分からぬ夢の世界なので、一通り役に立ちそうなものは身につけてきた。

陽輝は、勤務中だろうが、常時持っている。

緑麗も、昔はずっと持っていたものだ。

それは、本来、飲用ではなく、気付用や消毒用にするためのアルコールを入れるスキットルだった。

「中身は、確か『名月』だ。別に、俺は用がないので捨ててもいいんだが……」
九雷は、緑麗がいまにも聖魔剣を投げ捨てそうな雰囲気、笑みを堪えて確信する。

（全然、払拭してないじゃないか）

「お前がこれに用があるというなら、双方にとって有益な取引をしようじゃないか」

「め、『名月』!? あの、幻の蒸留酒と言われ、仙界オークションでは常に最高額で落札される、あの仙酒『名月』かつ!」

魁星は、「あーあ」という顔をしている。

結局、九雷のペースではないか。

病室から一步外に出た途端、沙龍は色々後悔もしたし、不安も感じた。

勢いだけで、後のことを魁星に任せてしまったが、こんな未体験の世界で、眠ってしまった自分を起こしに行くなど、かなり無謀ではないか、と今更ながらに気付いたのだ。

(キサさんに知られたら、またなにか言われるな……)

こんなときに、木佐が言うフレーズがすぐに思い浮かぶ。

「なんでいつもいつも、そう考えなしに行動するんだ。馨の場合は、〃行動するな、まず考えろ〃だ」

脳内の木佐が、やかましく小言を言うのを、沙龍は手を振って、押しやった。

「まあ、とにかく、ここは私の精神世界とやらなんだから、私に都合がよく出来ているはずだ。少なくとも、命の危険はないはず。……よし、考えたぞ。これでオツケー！」

沙龍は先に進むことにした。

なにかが出てくるにしても、それは自分の気掛かりとか願望であって、『敵』ではないはず、というのは、沙龍の勝手な理屈に過ぎない。

そもそも、理屈が通じない世界である。

「色が……ない」

沙龍は、さっきの病室には確かにあったはずの『色』が、すっかりなくなっていることに気付いた。

かといって、闇ではない。

辺りは、モノトーンのぼやつとした風景で、特に違和感はないのだが、覗き込んでみた地面ですらはつきりとした形を持っていない。

地面と地面でない部分の境界がない——、そんな感じである。

しかし、時折、明確に物音がする。

『色』の代わりとでも言いたげに主張するその音は、空気が動く音であり、人ごみの雑音であり、どこにでもあるような生活音だった。

決して、化け物の咆哮ではないし、白刃の触れ合う金属音ではない。

そのせいか、味気ないモノトーンの風景の中に居て、沙龍は緊張感を感じていない。

(生まれる前の景色ってこんなもんかな)

ふと、そんなことを思った。

魁星は『最初の記憶』を探している、と言った。

それは、名前は明かせないがとあるVIPからの要請で、かつての緑麗が確かに知っていたはずの『機密』なのだそうだ。

沙龍はそれを聞いたとき、ひどく落胆した。

そういう具体的な目的を聞いてしまうと、結局は魁星も、根は真面目な、単なる『イイ奴』になってしまったからだ。

特に、魁星になにかを期待していたわけではない。

むしろ、そういった目的がないとしたら、魁星は殺さなければならぬハタ迷惑野郎になる。

しかし、そうではないのだ。

沙龍が心のどこかで望んでいるのは、そういった『最初の記憶』を完全に抹消

することなのである。

だから、魁星が『情報収集』ではなく『破壊』に来たというのなら、沙龍は歓迎したはずだった。

それは、自分にはできないことだからである。

緑麗が心の底で望んでいたものが、沙龍には分かる。

彼女が本当に欲しかったのは、『普通の姿』だった。

金髪でも、絶世の美女でもない、ごく普通の姿。

それを、沙龍は、玉帝と見え、緑麗の記憶を再現されたときに理解した。

友人のため、愛する人のため、神獣『麒麟』を確実に倒すため——。玉帝と一計を企て、地上へと墮とされた緑麗だったが、本当は、緑麗は自ら地上への転生を望んでいたのである。

あの美しい体と顔を、なによりも、誰よりも鬱陶しく思っていた緑麗は、そんな——他人から見れば贅沢な——理由で、『普通の姿』での転生を望んでいた。

『ないものねだり』とはよく言ったものである。

緑麗がどんな人生を送ったのか、沙龍は人伝の話でしか知らない。

しかし、その転生したかった理由が、端から見てどんなにつまらないものであろうと、緑麗にとっては、紛れも無く一番の理由だったのだ。

(考えてみりや、確かに一番自分勝手だ)

沙龍は、緑麗のことを人事として、そう思っている。

結局、緑麗はなにも損をしていない。

自分の願いは全て叶って、友人も恋人も、現在を生きている。

(……いや、色んな負荷は持っていたのかもしれない。生まれながらにして)

その『負荷』が、沙龍の心にも残っている、幾つかの断片的なシーンなのだろう。

詳しい歴史は沙龍にはなにも分からないが、玉帝によって全て消されたはずの緑麗の記憶は、一部だけ、まるでスクリーンに焼きついてしまったように、沙龍の心に残っているのだ。

東海龍王敖坤に語ったのも、その一部である。

それは、幾つかの風景であり、それに対する緑麗の感情でもある。小さい頃は特にそれを気にしたことはなかった。

白昼夢を見ることもなかったし、夜見る夢にも、それらは頭れなかった。

たまに、なにかを見て、奇妙な感覚を覚えることがあったが、それも、日常の中で、すぐ忘れるようなものだった。

しかし、天界に来てからは、ふとした拍子に幾つかのイメージが頭に浮かぶ。

それは、昼だろうと夜だろうと関係なく見る。

実験室のような、乳白色の部屋。

柔らかな水のイメージ。

端整なのに、妙に生理的嫌悪を覚える、ある老齡の男の顔。

そして、確かに聞き覚えがあるのに、思い出せない誰かの声――。

すぐに分かった。

それらは明確に、玉帝が消すことのできなかつた緑麗の記憶なのだ、と。

冷え冷えとしたモノトーンの風景の中、最終地点と思われる場所で沙龍は立ち止まった。

大きな扉もなければ、落とし穴が開いているわけでもない。

しかし、ここが『魂魄の深遠部』なのだろうと分かった。

この一帯だけ、重力が違うように感じる。

まるで、一番重い四度の水が漂う、水の底のようだった。

周囲の揺らめきも、やはり、水のイメージである。

だとすれば、頭上にあるのは、分厚い氷といったところか。

「なにもない……。どうということ……？」

眠り姫のような自分が居るのではないかとチラツと思っていたが、そこにあるのは、ただのモノトーンの風景の延長である。

こんななにもない所でなにをすればいいのか、沙龍はますます分からなくなつた。

いま、持っているものも、なにもない。

外部との交信だって、例えば携帯電話を持っていたとしてもできないだろう。

「……」

沙龍は、自分の左の手のひらをじっと見た。

自分がなにか持っているものがあるとすれば、いまはこれだけだ。

この利き手である左手で、幾つかの命を奪い、永らえてきた。

沙龍にとっての、『力』と『死』と『生』の象徴——である。

「普通の女の子になりたかった——なんて、どっかのアイドルみたいなことを願っても、結局、これだ。学校帰りにクラスの女の子達と一緒に、ファースト・フードの店でバカな話でもしたかったってか？ それなら、私はやったぞ。対面に座ってたのは毒舌美少年だったが」

沙龍は投げやりに呟いた。

「結局、貴女も私も、誰かの思惑によって『造られた命』だ。それを嘆いたのか？ だったら——」

そこまで言って、沙龍はハツとした。

恐らく、九雷と出逢ったときよりも、玉帝に真実を告げられたときよりも、驚愕すべき事実気付いたからだ。

「まさか——、緑麗、貴女は……!!」
そのとき、足元が暗転した。

「あ、やべ、気付いちやった」

海苔つきの煎餅を口にくわえたまま、緑麗はリモコンをスクリーンに向けた。すると、ホーム・シアターのような中型スクリーンに写し出されていた沙龍の姿は、そのまま、足元に吸い込まれていくように、消えた。

魁星は気絶したまま、そこら辺に転がっている。勿論、『名月』欲しさに緑麗がやったのである。

九雷は、緑麗が説明してくれるのを待ったが、いま、沙龍が気付いたことと、自分が推測の上に達した結論はほぼ同じだろう、と思った。

「スタンド・プレーだって怒ってんだろ？ まあ、それについては謝る」

沈黙の理由を、緑麗がずばり指摘すると、九雷はため息をついた。

「もう、お前に振り回されるのは慣れている。陽輝に言わせれば、俺もMなんだ
そうだ」

「牀しょう（寝台のこと）ではSのくせに……」

緑麗がぼそつと言った言葉は無視して、九雷は席を立った。

いつ、どこから、そんなテーブル・セットが出てきて、このホーム・シアターのような部屋が現れたのかといえ、緑麗に言わせれば「ここは自分の精神世界だから、自由自在」という。

『名月』を呑みながら寛ぐ元恋人は、まるで生前と変わっていない。

「これで沙龍は目覚めたことになるのか？」

「恐らくな」

「魁星はどうなる？」

「お優しいな。殺しても足りないはずのこいつを気遣うのか」

緑麗はニヤツと笑って言ったが、九雷は真面目に答えた。

「勿論、放置しとくつもりだが、お前の迷惑にはならないのか、と聞いている。

自力では戻れなくなったらしいからな」

九雷がそう言うと、緑麗はソファから立って、気絶したまま目を回している魁

星の胸倉を掴んだ。

「こいつがそんな殊勝なもんか。本当はできるんだよ。私の『最初の記憶』を知りたいために、『夢封じ』に失敗したフリをしていただけだ」

九雷に酷い目に合わされることが分かっている、そんなことをする魁星は、やはり、理解不能だった。

「起きろ、魁星。いつまで人の寛ぎ空間で醜態晒してる」
緑麗が魁星の体を揺さぶると、にわかに関目を覚ました。

「あれ？ 緑麗ちゃん……？」

「お前の用は『これ』だろう。出血大サービスでタダでやるから、九雷に殺されないうちに早く帰れ」

と、緑麗は大きめのフロツピー・ディスクを魁星に投げた。

「なに、このでっかい旧式のディスク」

「昔のサイズしかないんだ。火雲宮の倉庫にプラットフォームは残ってるだろ」

「謝々。これで、僕も陛下に顔が立つよ」

「お前には、一度、近衛隊長を辞退したとき、世話になったからな。その借りだ」

「善行はしておくもんだね。それが打算つきでもさ。……で？　九雷は僕を見逃してくれんの？」

面白くなさそうな顔をしている本人に聞いてみたが、「面倒くさいから」の一言で済まされた。

「相変わらずだよ……もう……」

大袈裟に肩をすくめる魁星は、二人の間に流れる微妙な空気を読み取って、すぐにその場を去った。

「よかったのか？　魁星にあれを渡して……」

九雷は、さつき魁星が喜々として懐に仕舞い込んでいたディスクのことを言った。

「昔は極秘だったが、いまはもうそんなに価値はない。どうせ、西海龍王が色々やり過ぎて、既に先方には薄々気付かれているだろう」

「それも聞きたかったんだが、なぜ、敖閏殿なんだ？　お前が、天界を去る前

に、敖閏殿に頼んだのは『それ』なのか？」

「なぜ西の龍王かといえ、あの人は私の親みたいなものだから。別に、九雷でも陽輝でもよかったんだが、お前達には神獣のことを頼んでたから、頼みごとを増やすのもどうかと思って」

「要らん気の遣い方だ」

「私と敖広が、いずれ敵になると思っていたあのジーサンは、最初から黄龍を喜ばしく思っていなかったんだ。異端の存在、厄神、災いをもたらすもの——と。まあ、麒麟が現れてからは、それは事実ではあったんだが、あそこまではつきりと悪意を持って黄龍を眺めていたのは、あのジーサンだけだった。四方将神達は、敖広だけじゃなく、皆、勘付いていたと思う。ただ、聖霄はあの頃、帝都に居なかったし、赤帝君はそこら辺、ちよつと鈍いというか、善人過ぎるんだ」

九雷は、静かに頷いた。

「それに、真武君は勘付いても我関せずだったからな」

「それで、敖閏殿に頼んだのか。『起家』が行動を起こすかもしれないから、そのときは阻止してくれ、と？」

「ああ、龍王家にとっても、全く関係ない話じゃないからな。特に南海龍王家は、あのジーサンと繋がりが深かったし。……って、いまの南海龍王、誰だっけ？ もう敖明は引退したのか？」

「お前は知らないか。いまは敖明殿の末娘が継いでいる。陽輝の奥方さ」

「え！ あいつ、結婚したのか！ ほー……、今夜にでも、祝電打っておこう」
冗談なのか、本気なのか、緑麗は電話帳をめくっていた。

しかし、その手をふと止め、急に明るくなったスクリーンに映し出されたものに目を向けた。

「……」

「……」

二人は、しばし黙って、同じものを見ていた。

誰も居ないその景色は、水色の空と、一面の黄色い花で埋まっている。

その場所を、二人とも知っていた。

いま、誰がこの夢を見ているのかということも。

「悪夢は終わったか。……分かるか？ 九雷。『これ』が、馨の『一番幸せな景

色』さ」

緑麗がスクリーンを見ながら微笑む。

それは懐かしいものを見るような、少し寂しげな微笑だった。

14 現実の始まり

その眩しい景色から先に目を離したのは九雷の方だった。

「さつき、敖閏殿でも、俺でもよかった——と言ったな？　なら、俺にも教えてくれ、緑麗。お前の『最初の記憶』はどこにある？　さつき魁星に渡したのは、単なる『起家』の情報に過ぎないんだろう？」

「やはり、それが知りたいのか」

「俺は好奇心で言ってるんじゃない。沙龍を——」

と、言いかけて九雷は言葉を切った。

「沙龍を護るために必要だからだ」という言葉は、緑麗の前で言うべきではない気がしたからだ。

「また言葉を飲み込むんだな。悪い癖だ。その先が聞きたいのに」

緑麗は自分がどこで生まれ、どう育ってきたか、ということを誰にも話したことはなかった。

幼少期を一緒に育った白帝君も、それについては全く知らなかった。

師父の太上道君に聞いたこともあるが教えてくれなかったし、事実、太上道君も緑麗の出自については、詳しいことは知らなかったようだ。

そして、緑麗のこういった話になると、一番、知ってる可能性があるのが西海龍王なのである。

緑麗もさつき「親のようなもの」と言っていたし、生前にこの二人に交流があつたのは九雷も知っている。

「私の『最初の記憶』を、貴方に教えることはできない。それは、勘弁してくれ」

なぜ、と聞きたかったが、九雷はまた黙った。

緑麗はその無言の問いかけに答える。

「私は、残像みたいなものなんだよ、九雷。残る気はないのに、残ってしまった、この魂魄に焼きついた、記憶と感情のみの存在——。なにも生まないし、なんの影響力も持たない、やがては完全に消えていくであろう存在だ。いまはこうして、焼きついてしまったものを管理しているが、それも、馨の記憶と同化する

か、馨が管理できるようになれば、用済みになる」

「……」

「私にはなんの決定権もないんだ。もし知りたいのなら、さつき馨がなにか気付いたはずだから、馨に聞いてくれ」

「しかし……」

「貴方のことだから、大方、推測はついてるはずだ。そして、それは間違っただろう。いまの私に言えるのは、それだけだ」

「そうか……」

そんなしんみりとした雰囲気をまるで読まず、唐突に、緑麗が、九雷の腰辺りを指した。

「さつきから聞こうと思ってたんだが、随分、不似合いなりボンをつけてるな？」

「ああ……、これは、沙龍のだ」

「しかも、南海の『霸王』の匂いがする。もしかして、元はさつき言ってた龍王公主のものか？」

「よく分かるな。残像になっても、酒の知識と勘は健在か。……しかし、奏欽殿は下戸のはずだが……」

「そうか。なら『霸王』になる前の状態の真珠を常に身に着けてる、とかかな？」

「真珠？」

「ああ、『霸王』は南海のレアな真珠に浸して造るんだ」

「ほう。よく知っているな」

「まあ、飲んだことがあるし……。っていうか、これも説明できないのか。あゝ、こういう役目はつくづく私には向かないよな。なのに、あのジーサンのせいで、ダラダラとこんな場所で仕事しなくちゃいけなくなつて、もー、早く自由になりたいっての」

「仕事？ 煎餅をかじって酒を飲んでるのが？ と九雷は思ったが、口にはしなかった。」

「まあ、どうせ、馨も貴方も、ここで起きたことは忘れるからいいんだけど」「なんだって!? じゃあ意味がないじゃないか」

「だから、言っただろ。『私はなんの影響力も持ってない』って」

「……」

「あ、でも、魁星だけは『獮使い』なんで、しっかり覚えてるはずだぞ」

「そうか……。いずれにしても、あいつを遊ばせておくわけにはいかない。なにか役職にでも縛り付けておくさ」

といっても、元の日常に戻ったときに、そう思ったことを覚えてはいないだろうが、魁星がふらふら遊び歩いてる様を見れば、自分はきっと同じことを思うに違いない、と九雷は思った。

「そろそろ、眠り姫が目覚めるぞ？」

緑麗に促されて、九雷は顔を上げた。

「……俺はお前に会えてよかった。幻でもな」

「そうか」

と、あっさり言う緑麗には、やはり、肉体を持っていた頃の情はないのかもしれない。少なくとも、九雷にはそう見えた。

「どうせ忘れるのかもしれないが、一つ、聞いておく、緑麗」

このとき、緑麗に聞いたことを覚えていたのか、九雷は後に、その通りのこと
をすることになる。

いや、忘れてはいたが、結果として同じになっただけ——かもしれない。

* * *

「……あれ？」

ぱっちりと目を開けた沙龍は、なぜ枕元に九雷が座っているのか、分からな
かった。

昼寝をしたのは覚えているし、彼が休日出勤で出かけて、そろそろ戻ってくる
頃なのだという事も知っているが、なにかがいつもと違う。

九雷が妙な顔をして自分を見ているのだ。

微笑むでなく、心配するでなく、なにかを悟ったような、それでいて不安を滲
ませたような、そんな妙な顔なのだが、その表情は如何とも説明のしようがな
い。

「どしたの……？ 大丈夫……？」

心配されているのは、もしかしたら自分の方かもしれないが、沙龍はそう言つて、九雷の頬に手を当てた。

「……!？」

思わず、反射的に手を離してしまいたくなるほど、冷たい。

しかし、冷たいのは、自分の方だ、と気付いた。

が、そうと気付いても、寝起きの頭と体ではなにもする気にはなれないし、元々、そういう特殊な体なのだから仕方ない。今更、別に慌てる理由もないのだ。

「九雷……？」

相変わらず、なにも言わずに、自分を見つめるだけの九雷になにか言葉を発してもらおうと思ったが、それよりも先に、大きな両手が自分を掬い上げた。

(まあ、いいか……)

このヒンヤリとした冷たさが沙龍にはなにより心地よいのだ。

碧霞元君は、ふと、いままで熱中していた携帯ゲーム機から顔を上げ、やや上空を見据えた。

「来る——」

しかし、その視線の先には、黄花洞こうかどうの廟内の、レリーフの施されたクリーム色の壁しかない。

碧霞元君は、埃が溜まるからこのレリーフは嫌いだと言うが、毎度、掃除をするのは、ナンカイ・ホークス君参号の方である。

いまもホークス君は渦巻き模様のレリーフにハタキをかけている最中だった。「なにが来るんですかい？」

三角巾で頭上を覆ったホークス君が振り向いたときには、碧霞元君はもうゲームに戻っていた。

小さな碧霞元君は、どんなに頑張っても十五、六歳くらいにしか見えないが、

実際には天真と同世代である。

住んでいる場所のせいで歳を取らない——どころか、年々若返ってさえいる——ということだが、本人は、大抵の女性が羨むこの境遇を、あまりよく思っていないかった。

「いや、隠しボスがね。来るよ、もうすぐ」

瑠璃色の大きな瞳を小さなゲーム画面に貼り付けて、碧霞元君は人事のように言った。

「お嬢、あんまりゲームばっかやってると目悪くなりますぜ。あっしのお手製ラUNCHはちゃんと食べたんですかい？」

父といい娘といい、どうも凝り性の性格のようで、一旦、なにかをやり出すと三日くらいご飯も食べない、なんてことはしよっちゅうだった。

碧霞元君の父、泰山府君も、たいざんぷく実験に熱中していて、ミイラのような状態で発見されたことがある。

だから、ホークス君はこの無駄に凝り性な主から目が離せないのだ。

「うん、食べたよ」

上の空でそう答える。

食べたよ、三日くらい前に、というのが本当の答えだとホークス君は知ってるので、食卓まで確認しに行った。

案の定、今朝の朝食も、昼食も、まだ手付かずで残っている。

それを電子レンジで暖めながら、今日はどうやってあのゲーム機を取り上げようかとホークス君が思案してる中、サツパリした顔で碧霞元君がやって来た。

どうやら、一ゲーム終わったようである。

「絶対零度って知ってる？」

突然、碧霞元君がそんなことを言い出して、玉露の用意をしていたホークス君は、「またか……」と少々うんざりした。

しかし、いつもはアンニュイな碧霞元君の大きな瞳が、今日は生き生きと輝いている。

「摂氏マイナス二百七十三・一五度の、到達不可能と言われている温度なんだけど。五行の世界では理論上は簡単に到達できるんだよね。なぜかっていうと……」

……

「お嬢、必殺技の話はいいですから、早く朝食と昼食、食べちゃって下さい。もうすぐ夕飯作り始める時間なんですぜ？」

「あれ？　なんで必殺技の話だつて分かったの？」

「お嬢の口から、必殺技じゃない話を聞くのは、思い出す限り、一年前くらいの『あ、雪降ってる。雪だるま作ろうーつと』くらいですから」

「去年、天空山に雪なんか降ったつけ？　まあ、いいや。それでね？　唯一、隠しボスに対抗できる、究極必殺技なんだよ」

「はいはい、それで？」

適当に相槌を打つホークス君は、割烹着に着替えて、米研ぎを始める。

霊獣のホークス君には少し狭すぎる台所なのだが、彼は器用に両羽を使っていた。

「でも、それを使うには条件が厳しいんだよね。緑麗しか出来なかった『真・黄龍召喚』を、甲斐馨にやらせようと思ったら、絶対死人が出るよ」

「へえ、そうすか……。つて、お嬢、なんの話をしてるんで？　緑麗様つて、もしかして、一度、黄花洞を訪ねてきた、あのザ・ダイナマイツ将神のことですか

い？」

「そうそう。とりあえず、夕飯終わったら、出掛けよう。新しい東方軍大将に会いに行くよ、ホークス君」

* * *

その後、魁星が近衛府の隊長に就任したという話を、沙龍は風の噂に聞いた。恐らく本人は渋々の官職に違いないが、あのスチャラカ・サラリーマンは、遊び歩いているより、少しは禁欲的に仕事をした方が本人も周囲も平和なはずだ。

帝都は今日も穏やかな風が吹いている。

が、春特有のその風に例年の勢いはなく、それを憂いているのは新任の東方軍大将、景春けいしゅんだけではなかった。

「懐かしいだろ？」

九雷が、春明門に挨拶するように手を触れて立ち止まっていた景春に言った。

「ああ、なにも変わってないから、却って拍子抜けした感じだな。俺が酔っ払っ

て付けた刀傷が残ってる」

景春は、若き日の自分の愚行を思い出して苦笑した。

九雷もその頃は若かった。

二人で夜毎、はしごをした仲である。

「金光門は新しく造り直されたって話だが……、誰がやったのか、想像がつくな。……いや、つきます」

景春は、九雷より少し背は低いが、体格は一回りくらい大きい。

一目見て鍛え上げられたと分かる、筋肉質の肉体を持っていた。剛健な感じの男だ。

が、それよりも、鋭い瞳の方が印象的だった。

「気を使うな。その金光門を壊した男なんて、人前でもタメ口だぞ？」

「そういうわけにもいかないですよ。いくら旧知の仲とはいえ、貴方は上官ですから」

景春はそう言って、もう一度、久しぶりの帝都を、くぐった春明門から眺めた。

これから一体なにが起こるといふのだろう。

火雲宮も、帝都も、一見のんびりとした平穩の中にある。

しかし、九雷も景春も、穏やかな巽風の中にかすかに流れる不穩な空気を確実に感じ取っていた。

『absolute zero』 完

... to be continued 『巽風編』